

本との出会い 人とのふれあい

— 「本を通じた心のふれあい」 体験談 —



平成16年11月
栃木県総合教育センター

まえがき

近年、子どもを取り巻く読書の環境はかつてないほどに盛り上がりを見せています。多くの学校で「朝の読書」が導入されるようになっただけでなく、ボランティアによる読み聞かせ等の読書活動が盛んに行われるようになりました。県内の各市町村では、乳児期からのブックスタート事業を導入するところが増えていきます。県も、平成十六年二月に、「子どもの読書活動推進計画」を策定し、県内のすべての子どもたちが、あらゆる機会や場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、家庭、地域、学校を通じた社会全体で取り組むための環境づくりを進めています。

当センターでは、「子どもの読書活動推進計画」における施策の一つとして、「本を通じた心のふれあい体験談」を、広く県民の方から募集し、本冊子を作成しました。関係機関においては、読書活動推進の一助としてご利用いただければ幸いです。

平成十六年十一月

栃木県総合教育センター所長

佐藤信勝

目次

児童生徒編

ほんがだいすき	1
わすれんぼうをなおそう	2
ねるときの本	2
本が大好き	3
ありがとうカリブさん	4
家族で読むと楽しいよ	5
本が大好き	6
本がくれた幸せ	6
平凡な日々の幸せ	8
本と私	9
私と本の関係	10
本を読んで・・・	11
頑張った夏休み	12
うつのみや子ども賞選定委員になって	13

世界で一番うれしい言葉
本を通して

読書を通じたふれあい

一冊の本を通して

本と私

本の絆きずな

今まで読んだ私の本について

ありがとう

雨が好きになったわけ

読書会に参加して

保育士・教師編

絵本の力	25
母から子へ、絵本を通じた家族のつながり	25
絵本との出会い	26
絵本について	26
伝えたい絵本	27
絵本への思い	27

絵本と出会うことで

絵本の読み聞かせから

私が一番好きな絵本

Y先生の思いで

本を通していろいろの人との出会い

読み聞かせから広がった

心の交流

それぞれの『道ありき』

思い出

本の贈りもの

「舞姫」の朗読

子どもの本を選ぶ楽しみ

本のある暮らし

一冊の絵本を通して

子どもたちといっしょに楽しんで

読み聞かせを通して得たもの

私と読み聞かせボランティア

読書の誘いを期待して

やっぱり子どもたちは、本が好き

感性豊かな子に

子どもとふれあえる喜び

読み聞かせと大型紙芝居

読書の喜び

二人の子どもと読み聞かせ

円地文子の源氏物語

子どもたちに名作を

文学講座を通して

一般編

大好きな一冊の絵本

絵本のマジック く父として、幼稚園教諭として

「おやすみなさい」の前に

思いが自分を変えらるということ

娘の成長を支えたもの

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

51

52

54

54

37

39

39

40

28

29

29

30

31

31

33

33

34

35

36

ほんがだいすき

わたしはほんがだいすきです。ほいくえんのころから、いろいろなほんをよんでいました。おかあさんもわたしがねるまえに、たくさんよんでくれました。

そのなかでも、『おむすびころりん』はおもしろくて、なんかいもよんでもらいました。しょうがつころにはいったら、きょうかしよにもでていたのでたのしくなりました。おんどくのしゅくだいがたときは、しつていたので、すらすらとよむことができました。

ひがしはらしょうがつころでは、あさがっこうにくると、みんなでどくしよをします。どくしよのじかんが、わたしはだいすきで、きょうしつにあるいろいろなほんをよんでいます。あさ、ほんをよむと、こころがおちついて、たのしくなります。

わたしは、がっこうでもほんをかりていますが、しのとしよかんでも、ほんをかりてよんでいます。ことしのなつやすみには、おかあさんといっしょにいつて、『このはおかねつかえます』というほんをかりました。

このほんは、こだぬきがあいすくりいむがたべたくなつたので、おかあさんだぬきが、このはおかねにかえるおはなしです。ほんとうに、このはおかねになるなんて、わたしはびつくりしました。おかあさんはこだぬきのために、なんかいもまほうをつかってたいへんだな、とおもいました。

あいすくりいむやおじさんがゆういんしたときは、いっしょうけんめいおてがみをかきました。まいにちまいにち、おじさんがげんきになるように、おてがみをかきました。こだぬきはやさしいな、とおもいました。わたしだったら、まいにちかけるかな、とおもいました。おかげで、あいすくりいむやおじさんは、げんきになってたいいんできました。よかったとおもいました。

わたしは、このほんをよんで、こころがあたたくくなりました。またよんでみたいです。

黒磯市立東原小学校 一年 Kさん



わすれんぼうをなおそう

わたしは、とてもおもしろいほんをみつめました。それは、『わすれんぼうをなおすには』というだいいいのほんです。

そのおはなしのなかで、ララさんが、ロールキャベツをつくろうとして、おみせのまえまできて、かうものをわすれてしまったところが、とてもおもしろかったです。

もし、わたしだったら、ちゃんとわすれずにおかいものをして、りょうりをつくるのになあ、とおもいました。

ララさんは、けっきょくロールキャベツをわすれたまま、じゃがいもをかって、ぐつぐつにたじゃがいもに、ケチャップをかけて、たべてしまいました。

わたしだったら、それだけたべたのだったら、もしわすれてもすぐにおもいだすのになあとおもいました。

けっきょくララさんは、わすれんぼうを、なおすことはできませんでした。

わたしも、よくわすれものをしてしまいます。このほんをよんで、おかあさんと、わすれもののはなしをしました。おかあさんと、いっしょにかんがえました。

わすれものをしないように、きをつけるやくそくをしました。

黒磯市立東原小学校 一年 Eさん

ねるときの本

ぼくのいえでは、ねるときいつもおかあさんかおとうさんが、本をよんでくれます。本をよめないときは、おはなしをきかせてくれます。まいにちねるまえにぼくとおとうとは、きょうのねるときの本をきめるのがとてもたのしみです。でも、ときどきおなじ本になって、けんかになってしまいます。すると、「きょうはよまないよ。」とおとうさんにいわれるので、ぼくとおとうとはすぐにごめんなさいをいいます。

いま、ぼくがすきなのは『おおきな木』という本です。おとうさんがなつやすみにかつてくれました。ちびっこがおおきな木といっしょにあそんでいるところがだいすきです。でも、おおきな木がきられてしまうところがとてもかわいそうでした。まいにちおなじ本をもっていくと、「ちがう本にしたら。」といわれるけれど、ぼくはきょうも『おおきな木』をよんでもらいたいです。

おとうがすきなのは『あおくんときいろちゃん』という本です。ぼくもほいくえんのとき大すきでした。あおくんときいろちゃんがかよしになって、みどりちゃんになるところがとてもふしぎです。

ぼくとおとうとは、ねるときに本をよんでもらうと、よくねむるので大すきです。

河内町立岡本北小学校 二年 Kさん

本が大きい

わたしは、本がすきなのでひる休みにいつも図書室に行つて、いろいろな本をかりています。きよねんは学年で二ばん目に多く読んでしようじょうをもらいました。

この前『ブタのたね』という本をさがしていたら図書室のきみじま先生がいつしよにさがしてくれました。ちょうどそのとき一年生の女の子がかえしにきて、

「読むの。」ときいてくれたので、わたしは、「ありがとう。」

といつて、かりました。うれしかったです。

いえにかえつてからお父さんにも読ませてあげたら、わらつてから読んでました。弟やいもうとに読ませるとき書いてないことまではなしています。そうするとみんなおおわらいします。おかあさんはふつうに読みます。

本からいろいろなることがわかったり、できたりするようになりす。

夏休みに読んだ本で、こんなことがわかりました。

わたしは、自分からあいさつができません。でも、『ハムスターともだちつくろう』のななちゃんのように、あいさつは自分からしないといけないんだなとおもいました。

それにペットは、ちゃんとせわをしないとしんでしまうんだなとおもいました。

ハムスターをくれたゆうくんがてんこうして、行ってしまいました。そしてすこしたつて、今どはちがう子がてん

こうしてきました。

てんこうしてきただいちゃん、学校にあまりなれないとおもいます。でも、やさしい子がいれば、きつとすぐなれるとおもいます。

ゆうやくんが、ななちゃんにさかあがりを見せてあげました。ななちゃんは、だいちゃんにあのねちようのかきかたを教えました。

わたしの先生は、なんかいも

「人をきずつけちゃいけません。」

つていつもいつているから、わたしは先生にいわれなくても自分からすすんでやさしくしようとおもいます。

学校がはじまつたので、また本をかりることができます。もくひようは、一しゆうかんに四さつ読むことです。本の中でどんなともだちにあえるのか、なにを教えてもらえるのかワクワクしています。

黒磯市立東原小学校 二年 Yさん



ありがとうカリブさん

まい週火曜日の朝、^注カリブの人が、わたしたちのきょう室にきて、本や紙しばいをよんでくれます。

「みんな見えるかな。たったほうが、見えやすいかな。」などと、気づかいながら、ていねいにきれいな声で、わかりやすくよんでくれます。わざわざ、わたしたちのために、朝早く、学校にきて、本をよんでくれます。朝いそがしいのに、とてもうれしいです。

ときどき本をかりに図書室に行った時、

「しつれいします。」

と、はいつていくと、かならず、やさしい声で、

「どうぞ。」

と、いつてくれます。きょう室に帰る時は、

「しつれいしました。」

と、いつて、ドアをしめると、

「はい。」

と、かならず、いつてくれます。わたしは、それが、とてもうれしいです。

わたしは、カリブさんのしごとについて、もっとしりたいと思いました。春休みに、おかあさんといっしょに、カリブさんの、しごとのお手つだいにいききました。それは、学校にあるぜんぶの本に、バーコードを、はることでした。すぐたくさんありました。いろいろなお手つだいをしましたが、一番たいへんだったのは、本の番号のバーコードの

数じを、さがすことでした。いっぱい数じがあつて、目と手が、つかれて、いたくなつてきました。でも、しごとをしているカリブさんは、しずかでした。しんけんでした。いつも、本をよんでくれる、カリブさんとは、ぜんぜんちがつていました。ほんとうに、カリブさんは、すごいと、思いました。

わたしは、三日お手つだいにいきましたが、本がたくさんあつたので、なかなかおわりませんでした。おかあさんに聞いたら、カリブさんは春休み中ずっとしごとをしていました。先生が、

「きょうから、本かりられるから、休み時間にかりていよ。」

と、いつたので、すぐにいきました。

図書室のたなに本がきれいにならなでいたし、みんなの分のカードがならんでいてびつくりしました。カリブさんは、ほんとうにすごいと思いました。

わたしは、わたしたちのためにいっしょうけんめい本の整理をしたり、本をよんでくれたりするカリブさんがだいすきです。これからも、カリブさんのお手つだいをしたいと思います。

鹿沼市立菊沢西小学校 三年 Hさん

注釈 カリブ…K.L.V. 鹿沼ライブラリー ボランティアの略です。

家族で読むと楽しいよ

夏休みのある夜、ぼくは家族といっしょに一冊の本を読んだ。本の題名は、『もののけレストラン』。短い話が十こ入っている。かなしい話やおもしろい話、そしてこわい話が組み合わせてある。ぼくは、一度読んでいたので話の内容はわかっているのですが、家族に読んであげようと思った。

まず、『カーおばさん』という話をよんだ。トラックにはねられて死んでしまった男の子のお母さんが、ゆうれいになり歩道橋をわたる子どもをつき落とすというお話だ。

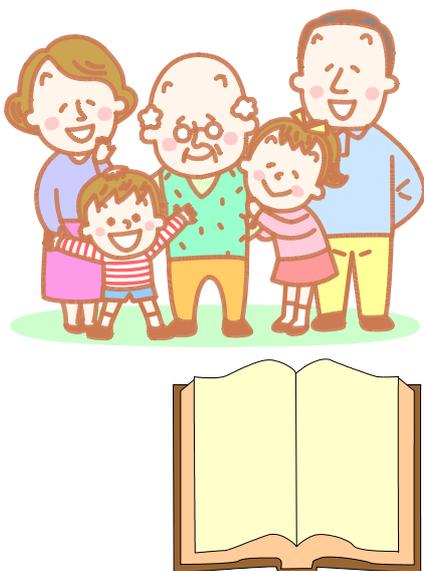
ぼくは、この言葉にかんじょうをこめて読んだ。弟と妹は、体を取り出してよく聞いていた。こわい場面では、体がかたくなっているのがわかった。読んでいるとき少しつかれたけど、みんなよく聞いてくれてるのがうれしくて、がんばって読んだ。お母さんが、読み終わったぼくに、「上手だね。気持ちよこめて読めたね。」と声をかけてくれた。ぼくは、ちよっぴりは、おかしかった。

次に、お母さんが『おれは、おれさ』というお話を読んだ。森の中で一人でくらすおじいさんのところに五人の大男がやってくるとい話だ。おじいさんがあつい湯を一人の大男の足にかけたとき、お母さんが「ギャー」と大声を出した。ぼくたち家族は、大わらいをした。「びっくりしたでしょ」とお母さんは、ニヤツとわらった。ぼくは、こんな読み方もあるのかなと思った。

そして妹は、『白い手の妖怪』を読んだ。

妹は、まだようち園児なのに、二ページも読めた。ぼくは、すごいなと思った。残りのページは、弟が読んだ。弟はせいいっぱいこわい感じを出そうとして読んだが、ぜんぜんこわくなかった。

家族で、本の読み聞かせを大かいにしたのは初めてだったが、とてもおもしろかった。テレビを家族で見るとおもしろいけど、本は、自分でそうぞうできるからちがったおもしろさがあるなと思った。秋になったら、夜が長くなるので、またしてみたいなと思った。それまでに、弟か妹が喜びそうな本を見つけておこうと思う。



黒磯市立東原小学校 四年 Mさん

本が大好き

夏休みに、お父さんと「川のつりの会」に行きました。そのつりの会に、新しい人が入ってきました。横はまからなすまで引っこして来たそうです。その人の子どもは、わかちゃんと言って、私の弟と同じ五歳で、川で一日遊んだだけで、新しい友だちになりました。

数日後、図書室にわかちゃんに行きました。最初に『子ねこが来たよ』という紙しばいを読んでもあげました。『子ねこが来たよ』は、子ねこがだれかにすてられてしまい、みこちゃんが拾ってあげたという話から始まります。それを聞いていたわかちゃんは、私に、
「読むの上手だね。」

と、言ってくれました。私はうれしくなりました。

次に本の所に行きました。本の所では、わかちゃんが、
「どれにしようかなあ。どれにしようかなあ。」

と、まよっていました。でも、まよっているのも楽しい感じがしました。

そして一さつの本を選びました。その本は、遊び絵本で、ページごとにめくると絵が変わります。わかちゃんは絵が変わるのがおもしろいように笑ってばかりいました。ふたりで読むのも、とても楽しくて、私はうれしくなりました。わかちゃんとは私は、五さつ本を借りました。

そのまま、川へ行き、紙しばいをわかちゃんに読んであげました。本もふたりで読みました。初めて会ったとき

よりもずっと仲よしになりました。

私は、一年生の時から本が好きです。弟も私が図書館に行くせいかな、弟までもが、本を好きになってしまい

「図書館へ行こう、行こう。」

と、毎日のように言います。それだけ本が好きなんだっていうことが、お母さんにもわかったみたいで、図書館に連れていってくれました。

私も弟もわかちゃんも、本が大好きです。

黒磯市立東原小学校 四年 Mさん

本がくれた幸せ

私は本が好きです。

私が本を読むのは、ストレスがたまった時です。学校でも家でもいやなことが続くと、ストレスがたまりません。ストレスがたまっている時に本を読むと、とても気持ちが落ちつきます。それは、私が本を読むのが好きなのと、本によつてストレスが消えてしまうからです。

私は小さい時、ねる前にお母さんによく本を読んでもらいました。長いお話も短いお話もありましたが、特に心に残っているのは、『メイベルおばあちゃんシリーズ』と『銀

河鉄道の夜』です。私が読んでもらっていると、いつの間にかひよっこりお兄ちゃんやお姉ちゃんもやってきて、一緒に聞いていたりしました。お話を聞いているうちにだんだん眠くなってねてしまったこともありました。しかし朝起きると、ちゃんとふとんの中にいました。私がねた後で、親が一階の部屋まで運んでくれていたのだと思います。お母さんが読めない時はお父さんに読んでもらいました。そのうち自分で読めるようになったので、今ではたいていは自分で読んでいます。

この間、しばらくぶりにお母さんに『幸福な王子』を読んでもらいました。今まで悲しいお話だとばかり思っていたのに、小さいころには気がつかなかったいろいろな細かいところのおもしろさに気がついて、お母さんとふたりで笑ってしまいました。楽しかったです。

私は本だけではなくマンガも大好きです。本やマンガのよいところは、一冊あればみんな楽しんでくれるところです。お姉ちゃんの部屋にあるたくさんマンガも、ちよこちよこ読ませてもらっています。ただし、お姉ちゃんの気分しだいでの「いいよ」と言ってくれない時は読めません。しかし、私もたまにねばります。すると、お姉ちゃんは、最後にはあきらめて貸してくれることがあります。面白いところは、お姉ちゃんと同じなので、いつまでもその場面にいて一緒に話せるので楽しいです。

家には『世界むかし話』という古い本があります。一九六八年に偕成社から出た本です。これはお母さんが、昔、おじいちゃんに買ってもらって読んだ大切な本です。おじ

いちゃんは、私が生まれる十三年前に亡くなっているのですが、私は会ったことがありません。けれども、この『世界むかし話』の本を通じて、おじいちゃんの思いが私にも伝わってくるような気がして、温かい気持ちになります。

この中に入っているたくさんのお話の中で一番好きなのは『せんにんがおしえたしあわせ』という中国のお話です。

ウーセイという青年が、自分の幸せを求めてせんにんに会いに出かけるのですが、途中で不幸な多くの人たちに出会います。人々は、せんにんに会いにいくというウーセイに、自分たちのことも聞いてきてほしいとたのみます。しかし、やっとせんにんに出会えた時、せんにんは、自分の願いかどちらか一つしかかなえてやれないと言います。ウーセイは、人々の願いをかなえてほしいと言いました。自分一人が幸せになるより、多くの人たちが幸せになった方がいいとウーセイは思ったのです。

私は、自分だったらどっちを選んだろうと考えました。とてもまよいますが、多分ウーセイと同じ方を選んだと思います。やっぱりみんなが幸せになった方がいいと思うからです。そして、ウーセイはなんてやさしい人なんだろうと思いました。

こんなふうに、今まで出会ったたくさんのは、私にいろいろなことを教えてくれました。でも、まだまだ読んだことのない本がたくさんあります。これから、どんな本に出会えるかなと思うと、私は楽しみでワクワクします。

平凡な日々の幸せ

「つまらないな。」

「なんで、生きてるんだらう。」

ぼくは、ついこういう言葉をつぶやいてしまうことがある。すると必ずお母さんが、「真はぐちっぽいんだから……。」と困った顔をする。

確かに、ぼくの言葉に大した意味はない。せつかくの休みの日にどこにも行けなかったり、宿題が忙しかったりすると、つい不平不満を口にしてしまう性格なのだ。特にぼくは、三番目の子なので、お姉ちゃん受験や、お兄ちゃん部活が優先され、後回しにされることが多かった。心の中ではいつも、

ぼくもがんばっているのに

と思っているのに、認めてもらっていない気がする。

そんなある日、お母さんが、

「この人、すごいんだよね。」

と、一冊の花の表紙の本をぼくに渡した。『鈴の鳴る道 星野富広』どこかで聞いたことがある名前だった。

「体操中の事故で、体が動かなくなっても、口に絵筆をくわえて、こんなにじょうずに花の絵を描いたり、詩をかいたんだよ。」と、母。

やっぱり……と思いつつながら、ペラペラめくると、「雨」というページがあった。それは、心配した女の子が車椅子の後ろについて来てくれたという内容の詩で、絵もとても繊細だ

った。

「これ、道德の時間にやったよ。」

ぼくは、思わず、大きな声で言ってしまった。「ねえ、真の好きなページを読んでみて。」お母さんに言われて、最初からいいねいに詩を読んでいたら、ふせん紙を付けたページだらけになってしまい、顔を見合わせて笑った。

「じゃがいも」もいいよね。「いのち」もわかるなあ。」

二人の選んだ詩がほとんど同じだったので、話はずきなかつた。でも、「豚」のページにふせん紙がはってあったのを見つけて、「へえ、「うういうのも好きなの?」「だって、豚はかわいそうだと思うもん。」と、意見のくい違いも見られた。

ぼくたちのやり取りを見て、お姉ちゃんが話に加わってきた。

「私が一番好きなのはこれかな。」

と、「しおん」という薄紫の花の絵はがきを持ってきた。お母さんは、その大切なはがきを見ながら思い立ったように、「星野富弘美術館に行ってみよう。」と、ぼくに言った。

運転手のお父さんは、早速インターネットで調べ、近所のおばあちゃんにも声を掛けた。勉強が忙しそうなお姉ちゃんも部活があったお兄ちゃんも休んでくれて、久し振りに皆がそろった。日光を抜けて、足尾を通り、静かな水面の草木湖のそばに、美術館が立っていた。初めての口で書いた時のたどたどしい文字が、壁一面に描かれていた。長い入院生活で、積極的に生きようとする気持ちを失いか

けていた富弘さんが、必死に一字一字書いたかと思うと、ぼくには力強く感じられた。詩の文字には、命がこもっているようで、花の茎にはきれいな花を支える力強さがあり、詩画集を見たとき以上の感動を感じた。さらに、このような作品を残せたのは、お母さんの励ましがあったからだという事がよくわかった。

この美術館に訪れる人の数は多く、作品は世界中の人の感動を呼んでいる。ぼくはまだ富弘さんのように、生きるか死ぬかの辛い経験をしたことはない。でも、富弘さんの詩画集と実際の作品を通して、平凡な日々の中にも喜びを感じようという気持ちになった。ぼくがこうして健康でいられるのも、口には出さないけれど温かい家族があつてからこそだとしみじみ思う。帰りに車の中で“かぎりなくやさしい花々”を読みながらそう思った。

宇都宮大学教育学部附属小学校 六年 Nさん



本と私

本と私の最初の出会いは、生後六か月の時だったと母が話してくれました。本といつても、動物や車がかかっているような小さな小さな絵本でした。本が大好きな子どもに育ってほしいという両親の願いで、このころから父が会社帰りに書店に立ち寄っては私の気に入るようなかわい絵本をたくさん買い与えてくれたそうです。

幼稚園児のころは、元気で活発といわれている現在の私からは想像できないほど、外で遊ぶことやテレビを見ることよりも静かに絵本を読むことが好きでした。いつも身近に絵本があり、いつも目にふれていたもので、私にとって、本に囲まれた生活は、自然なものでした。両親もよくひざの上に私を座らせては、本の読み聞かせをしてくれましたので、なおさら本好きになったのだと思います。絵本を読んでもらうことは、とてもこちよく最高に楽しい時間でした。今思うと、その時間だけはいつもの日常とはちがう私だけの特別な世界があり、親とともに楽しみ、喜び合えることがきつとうれしかったのだと思います。

小学校低学年のころは、図書室に通い、お互いにお気に入りの本をすすめあいました。本を通して友達との仲もいっそう深まりました。また、学校の読書週間をとても楽しみにしていて、前日に欲しい本を買ってもらえることがとてもうれしかったことを覚えていきます。

最高学年になった現在、学校から帰宅後は勉強が中心に

なっているので、休日を利用して読書を楽しんでいます。いろいろな分野の本に興味を持ち、新しい発見や感動をすることで知識が高まり心が豊かになれた感じがしています。

知識が高まることでまたそれに対して疑問が出てくることがよくあります。調べる手段としてインターネットを利用する方法もあります。しかし、以前に社会の授業で歴史についてインターネットで調べたところ、年表でまちがえてのっていることが一度だけありました。こういうこともあるのかと始めて知りました。その後もインターネットを利用することもありますが、私にとっては本が一番の資料であると確信しています。

最近、「活字ばなれ」という言葉を耳にしますが、私にはとても信じられないことです。活字のない生活は考えられないほどです。そう思えるようになったのも本のすばらしさを知ったからです。世界の国々では、一冊の本も手にすることできない困難な状況にある子どもたちが大勢いる中、こうして本を自由に読むことができる環境と本のすばらしさを教えてくれた両親に心から感謝したいと思います。そしてこの気持ちを忘れずに、これからも読書を続けていきたいと思えます。

宇都宮大学教育学部附属小学校 六年 Yさん

私と本の関係

私が初めて本にふれたのは、3歳のころだった。初めは祖父や母が本を読んでくれていた。

それから、私は一年生になると、もう本を一人で読むようになった。まだそのころは、母といっしょに読んでいた。

そして、三歳から小学校二年生ぐらまで、好きだった本は、マツチ売りの少女だった。私が四年生になると、もう一人で読みたがっていたということを知り、母から聞いた。

私は、聞くほうも好きだが、話すほうも好きだった。

私には、二年生の弟がいます。それで私は、弟に、時々ねる前に、本を一冊読んであげています。私が弟に、本を読んであげると、「おねえちゃん本読むのうまいね。」と言ってくれるのがとてもうれしいので、私は本を読むのが好きです。

宇都宮大学教育学部附属小学校 六年 Hさん

本を読んで…

私は、友達に本をすすめられて、本を読むようになって、毎日がとても楽しいです。

最初に、すすめられた本は、『ハリーポッターとけんじやの石』でした。

とても、おもしろくて、友達にかりてかえりました。おもしろくて、六回は、読みました。その後も、友達の家に行つて、『ハリーポッターと秘密の部屋』などをかりて、何回も読んで、毎日のように夜中まで読んでました。その友達はほかの小学校にも友達がいて、私が友達の所へ本をかえしに行くと、ほかの小学校の人がいて、私と友達とほかの小学校の人は友達になりました。三人で遊ぶ事がおおくなり、土、日は、ほとんど遊ぶようになり、三人でいると楽しいと感じています。

私は、もう一人の人も友達になりました。私が、ある本屋に行った時に、ある女の子が、

「バスケットの本、ある所知ってる？」

と、聞いてきたので、私は、

「知ってるよ、そこ！」

と、言うと、その人が、私に、

「名前、何て言うの？」

と聞いてきて、私が

「山、綾奈です。」

と、言うと、その人が、

「私は、　　って言うんだ。　　って、よんでね。」

「うん、じゃあ、私の事、綾奈ってよんでね。」

と言うと、

「うん」

といい、それから友達になり、夏休みなど遊ぶようになりました。それから、その人のお父さんとお母さんが、私のお父さんとお母さんとお友達になりました。それに、私のお父さんとお母さん、お兄ちゃん、私と妹、友達のお父さんとお母さん、弟と妹で海に行つたりしました。その友達とは、プールに行つたり、洋服を買いに行つたり、こものを買いに行つたり、プリクラをとりに行つたりして遊びました。その日に本屋に行きました。すると、目のみえない人がいて、私たちは、その人に、「何を、さがしているんですか？」

と聞くと、その人が、

「目のみえない人が、さわるとわかる本。」

と言うので、私たちは、さがしてあげると、その人の子どもがむかえにきて、その人も友達になり、その時、思いました。人にやさしくすると、友達がふえて、楽しい日がふえる。そう思つてからは、人にやさしくできるようになりました。

黒磯市立東原小学校　六年　Ｙさん

頑張った夏休み

私は、夏休みに二十四時間テレビという番組を見ました。私の好きなアイドル歌手が出演するということで、楽しみにしていました。

番組が始まり、様々なゲームやドラマ、ドキュメンタリーが放送されるにつれ、しつかりと考えていけなくなると思うことがたくさん私の心の中に強くひびいてきました。

それは、体の不自由な方々のがんばっている姿です。また、それを支えて一緒にがんばろうとしている人々の優しさです。

私はバレーボール部に入って、とても活発に動きまわっています。健康にも自信があります。それでも、少しつらいことがあると、「できない」とか「やめたい」などの弱音をはくことがあります。そんな自分に、必ず時間がたつとなさけなくなることもありました。このテレビ番組は、自分を強く、もっと変わりたいと思うきっかけになりました。

その後、私は本屋へ出かけることになりました。そこで、私の目に飛びこんできたのは、『ありがとうの本』というタイトルの本でした。人に優しくしたことから生まれてくる気持ちよさについて書かれています。テレビをきっかけに自分を変えていこうとしていた私にとって、人に対して優しくするということも、自分がふだん気にしていなかった部分だったので、読んでみようという強い気持ちにな

りました。

夏休み中にすぐに全部読みきり、なんか自分が大きくなったような、すがすがしい気持ちになりました。

ある日、お母さんと電車に乗る機会がありました。その日は、日曜日で電車の中は混んでいました。ふと、私のとなりの方の席を見ると一人のおばあさんが立っていました。お母さんは気づいていませんでした。私は、口のところまで、「どうぞ。」という言葉が出かかりましたが、実際には、出ませんでした。そして、顔が真っ赤になってしまいました。お母さんが、「どうしたの。」

と聞いたので、私は、「なんでもないよ。」と答えました。勇気がなかったのです。せつかく自分が大きくなった気がしていたのです。私は、そんな自分に腹が立ちました。家に帰ってもう一度あの本を読みかえしました。

それから二日後です。今度はお母さんの仕事の手伝いについていきました。そこは大きなお店で、たくさんの方が買い物にくるところです。手伝いもあきてきたので、自分の買い物しようとして歩いていると、階段の前で大きな買い物袋をいくつも持ったおじいさんがいました。そのときは、自分でも自然な感じで

「その荷物持ちますよ。」
と声が出ました。おじいさんは、「大丈夫だよ。」

と言ったけれど、

「私は大丈夫です。」

と答えました。おじいさんは、

「悪いねえ。」

と言って二つ買い物袋を私にわたしました。

とてもうれしい気持ちでした。みんなに自まんしたいくらいの気持ちです。少し成長した夏休みでした。

黒磯市立東原小学校 六年 Yさん



うつのみや子ども賞選定委員になって

「ごめん、もう少しまって。」

ぼくたちのあいだではたまにこういう会話があります。

ぼくは今年、友だちにさそわれて、図書館で本のあつたうつのみや子ども賞選定委員になりました。

もともと本が好きだったのでさそわれてすぐに申しこみま

した。いままではおもしろそうだとすすめられた本や自分で選んだ本をかりてきて、読みおわらなかつたときはえん長をして読んでいました。選定委員では、指定された本を指定された日までに読まなければならぬので、少し計画をたてて本を読むようになりました。それに、ふだん二人が行っている図書館と選定委員会のある図書館がちがうのでたくさん本が読めるようになりました。

選定委員会は毎月第二土曜日にあります。そこで、選定委員になった五・六年生二十人ぐらいが集まって本の評価をします。毎月四冊読むので一か月に友だちと二人で二冊ずつ交わいで読みます。それに、友だちと読むペースが同じではないので、おたがいに調せいするのが大変です。また、ものをしんさするのは好きな方なので、本に点数をつけるのはとても楽しいです。

ぼくがおもしろいと思った本でもおもしろくないと思う人もいるし、逆におもしろくないと思った本でもおもしろいと思う人もいます。人それぞれ好みや感じ方がちがうことがよくわかりました。こうして、直せつ言葉をかわさなくても、本を通して心のふれあいができるのではなにかと思います。そして、いっしょに入った友だちとも本について話をする機会が増えたように思います。

こういうわけです。うつのみや子ども賞選定委員になって、よかつたと思います。これからある七回の選定委員会もがんばっていききたいと思います。

宇都宮市立横川東小学校 六年 Hさん

世界で一番うれしい言葉

「お姉ちゃん、ありがとう。」

小学六年生の夏、私は、図書委員をやっていました。図書カードの整理や、古い本の修理をしていると、先生が「約、一か月後に全学年、全クラスに図書委員会が読み聞かせをやります。図書委員会は三人一組になって本を読み発表します。本は自由に選んでください。」

と、おっしゃいました。私たちの班は三年二組を担当することになり、三年生にもわかって、関心を持ってもらえるように、一週間もかけて、一生懸命本を探していました。やっと見つけた本、『おこりじぞう』に決めました。戦争中の広島が舞台で、笑いじぞうと呼ばれるお地蔵様が出てきます。そのお地蔵様はいつもここに笑っていました。ある女の子が「み…水…」とお地蔵様に近づいていくと、お地蔵様の顔はどんどん険しくなって、まるで仁王の様な顔になり、怒りと悲しみで目から涙を出し、女の子の口へと流します。その後、お地蔵様は力尽きて、粉々の塵となり消えていきます。女の子は水を飲み幸せそうに亡くなります。

この話を私たちは、紙芝居かみしばいにすることに決め、毎日少しずつ休み時間をつかって描きました。昼休みも読む練習をしました。大きな声ではつきりと。

「今日、いっしょに遊ぼう。」

「ごめんね、今日、図書の読み聞かせの練習があるからこ

めんね。」

と、友人からの誘いを何度も断った事もありました。でも三年生が喜んでくれるならと、頑張りました。

読み聞かせ二週間前、同じ読み聞かせの班の友人が

「ねえ、お地蔵様が怒るところとか、迫力が出るところに楽器で大きい音とかだせば、もっと迫力が出るんじゃないかな。」

と、思いついたように言ったので、私は、驚きと興奮の入りに混じった不思議な気持ちで言いました。

「私も少し考えてた。そうだね迫力だから…そうっ、シンバルなんてどう。」

と、皆の顔が一斉に変わりました。

「うん、うん、それすごくいいよね。」

「うわあ、ナイスアイデア、決まりだね、私、賛成だよ。」読み聞かせ当日は、私たちは、かちこちに緊張していました。

すると先生が

「あなたたちは、本当にすばらしいわ。さあ、思いつきりいつてらっしゃい。」

と、温かくおっしゃってくださいたおかげで、少し安心しました。「失礼します。」

私たちは、勢いよく三年二組の教室に飛びこんでいきました。「これから、『おこりじぞう』の紙芝居を始めます。礼っ。」

私たちは読み始めました。ゆっくり、はつきり、大きな声で。特に鉤括弧かぎかっこのところは、いっぱい、いっぱい心をこめ

て言いました。最後のクライマックス私はシンバルを打ちました。

「ババーン」

ざわっとしましたが、私はやった、と思いました。友人もにこつと笑い、ついにすべて終わりました。少しさびしさを感しました。

「ありがとうございます。礼つ。」

礼をした瞬間一瞬間が止まった気がしました。すると、教室の中が一斉に拍手で埋めつくされました。それに、中には、

「すごい、びっくりしたあ。」

「先生、もう一回見たいです。もう一回やらないんですかあ。」

と、言ってくれる子もいました。ふと気付くと女の子が私を軽くたいて呼んでいます。不思議に思っで行くと、女の子は言いました。

「お姉ちゃん、ありがとうっ。」

私は胸がいっぱいになり笑顔で言いました。

「こちらこそ、ありがとうねっ。」

鹿沼市立北押原中学校 一年 Kさん

本を通して

私は小さいころ祖母にいつも絵本を読んでもらったのをきっかけに、本が好きになりました。中学生になった今も本を読むことが好きです。ある日、学校の図書室で本を借りようと本を選んでいる時、国語の先生に

「この本おもしろいから読んでみな。絶対にはまるから。」とある本を勧められました。さっそく私はその本を借りて読みました。読んでいくうちにだんだん私ははまっていききました。そしてドキドキしながらあつというまに読み終わってしまいました。今まであまり読んだことのない冒険の本でした。

そのことがきっかけで国語の先生と親しくなり、本のことだけでなく、いろいろなことを話するようになりました。

そしてその先生に

「『KLVジュニア』をやってみない？」
と言われました。

『KLVジュニア』とは、学校の本の修理や新刊図書を受け入れ、小学校の本、紙しばいの読み聞かせなどを行っている『KLV（カリブ）』の人のように、中学生が本の修理やペーパーアターなどをやることです。

私は先生の話を聞いて興味を持ち、友だちといっしょにやってみることにしました。『KLVジュニア』では、主に素話（すばなし）といって、道具も何も使わないで話を語ることの練習をします。語り方などがけっこう難しいの

ですが楽しいです。素話の他にも、小学校の本の修理や、他校の『KLVジュニア』といっしょにペープシアターをやったりと、どの体験も初めてでしたが、とても楽しかったです。私は今、素話を覚えて語れるように練習中です。私は本のおかげで先生と親しくなったり、『KLVジュニア』という新しい体験をして他校の生徒と交流ができました。本の中には、話があり、その話に出てくる人物がいて、その人物・話によって筆者の思いがあります。私はいろいろな思いを伝えてくれる本をこれからも読みたいと思います。

鹿沼市立板荷中学校 二年 Hさん

読書を通じたふれあい

『ハッピーバースデー〜命輝く瞬間〜』を読んで、私は母とこの本について話し合いました。

私は小学四年生のときに友達に紹介されて初めてこの本を読みました。最初の一行から最後の一行まで感動づくしの本で、私は初めて読んだときからこの本が大好きになりました。私も母も、昔から本を読むことが好きで、私は母にもすすめました。

本の中で、主人公の明日香は母親に「明日香なんか生まれなきゃよかった。」と言われてしまったのですが、それを「お母さんは彩乃のこと生まれなきゃよかったなんて、思ったことないよ。」

と言いました。私はすぐうれしかったです。元から母とは周りの友達と比べて仲がよいほうで、二人で買い物などにも出かけていました。この本を読んで、私と母は今までより、さらに仲よくなった気がします。

最後のほうに、母親は明日香に今まで言ったことをあやまって、仲直りをするのですが、仲直りしたあとと母のように二人で出かけたりしませんでした。私と母は本が読み終わったあと、そのあとの明日香たちはどんなふうなのかを考えました。きつと二人で買い物をしたり、いろいろなところへ出かけたりしているんだろうな、と思いました。母もそう思っていたようです。

母は私に「ちよつと遠いところまで買い物に行こうか。」

と言いました。少し子どもじみてしまうのですが、私は、「私が働いて最初にもらったお給料でお母さんとどこか、おいしい物、食べに行こうね。」

と約束しました。とても仲がよかったのですが、こんな約束はしませんでした。この本のおかげでいろいろな約束ができたり話し合えたりしてよかったです。

矢板市立矢板中学校 二年 Mさん

一冊の本を通して

少し前、中学校の図書室に新しい図書が入りました。新しい図書は年に数回ほど、私たち図書委員が生徒のリクエストをもとに選定して入れます。

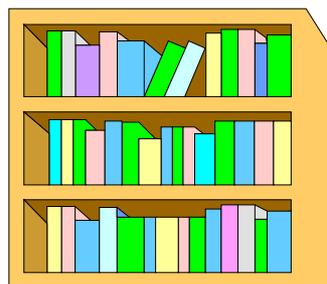
今回入れた新しい図書の中に今世界中で大人気の小説シリーズが上下巻ともに入りました。皆が皆、本当に楽しみに発売されるのを待っていました。そして発売日の次の日には学校中の生徒が買い、先生までもが朝の読書の時間に読んでいくくらいで、もちろん図書室にも入ってきました。基本的に本は一冊ずつしか入れないので、もう本当その日は争奪戦そうたうせんになってしまい予約はビッシリでした。

貸し出しを開始してから数日。買った人も借りた人も読み終わったころ、いつものように図書室で話をしていると、ある人がその小説の話を持ち出してきました。すると周りの人たちも寄ってきて、「ここはああだった」「よかった」「続きが気になる」「その先は言わないで!」「とだんだんにぎやかになっていき、とても話が盛り上がりました。本当は騒がしくしてはいけない図書室もこの時は少しいぐさいぐらいで、一年生から三年生まで関係なくずっと大勢で話をしていました。みんなの考え方やその小説に対する感想がおもしろく本にはすごい力があるのだと思い知らされました。

私の学校ではとても図書室を利用する人が多いのですが、そんな皆が一冊の本を通して楽しく話をするので

きる場になっているのはすごく素敵すてきだと思います。今はこの本を通して幅広い人たちと話しが出来たらどんなに楽しいだろうと考えながら一冊一冊を読んでいます。

宇都宮大学教育学部附属中学校 二年 Yさん



本と私

私は、今から二年前に宇都宮大学付属中学に入学しました。今までと違った新しい環境の中で一番私が心配していたことは、この中で友達を作り、うまくなじむことができるかという事でした。なぜかというと、私は人付き合いがあまりうまくなく、また、外部受験をして入学したため同じ小学校からの友達が少なく、知っている人が同じクラ

スにいなかつたからです。

なかなか自分から話しかけることができずに過ごしていましたが、私の後ろの席に座っている人が、朝の十分間の読書の後に私の読んでいた本を指して「私もその本を読んだことがあるよ」と話しかけてくれました。そのことがきっかけで私たちはよく話すようになりました。お互いに本が好きで沢山の本を読み合い、感想を述べ合ったり、お勧めの本を紹介し合ったりしているうちに友達の輪も広がっていき、気がついたころにはクラスに沢山の友達ができていました。

また、友達の図書委員から、本が好きなら色々な種類の本を読むことも大切なのではないかと言われ、図書室を少しずつ利用するようになりました。私は、図書室は静かに入りにくいというイメージ持っていたので授業の調べ学習のときぐらいしか利用したことがなかったのですが、図書委員の先輩や司書の先生が丁寧に接してくれてとても身近に感じました。図書委員の先輩たちは、文学だけではなく社会科学や総記などの普段は手に取らないような種類のお勧めの本を紹介してくれたので自分の読書の幅が広がったと思います。

本を通して私は友達の輪を広げることができ充実した中学生を送れるようになりました。

宇都宮大学教育学部附属中学校 三年 Iさん

本の絆きずな

私には、二つ年上の姉がいます。幼少のころはよく一緒に遊んでいたのですが、歳を経るにつれ疎縁になり、彼女が大学に入学したころには、話をするどころか顔を合わせず機会すら皆無に等しい状態でした。私も何とか彼女と話す機会を持つと努力したのですが、互いに忙しくてそれどころではない、というのが実情でした。それに、たまたま話す機会があつたとしても、姉と私とは共通の話題もなく、何を話したらいいのかわからなかつたのです。

そんなある日、私は友人と『屍鬼』という本の話で盛り上がりました。姉の部屋でその本を見かけたことを思い出した私は、機会を見て、「『屍鬼』って面白い？」と姉に話しかけてみました。すると、姉は目を輝かせて、力いっぱい頷き、「『屍鬼』の魅力について楽しげに語ってくれたのです。そして、『屍鬼』を貸してほしいという私の申し出を快く受けてくれました。

『屍鬼』は上下巻セットでかなり重量感のある本だったので、姉が言ったとおり非常に面白く、読むのが止まらなくなるほどでした。読み終えた後で姉にそう伝えると、それならば、と似たような系統の本をさらに数冊貸してくれました。そちらもやはり分厚いものですが、『屍鬼』以上に面白く、やはり読むのが止まらなくなって、一気に読み終えてしまいました。それらがあまりに面白かつたので、そのお礼として、私は自分の気に入っている本を姉に貸す

ことにしました。数日後にそれらを返してくれた姉は、「これ、面白かったよ」と笑顔で言ってくれました。

それ以来私たちは、自分の気に入つた本を教え合つてはそれについて語り合っています。姉が教えてくれる本はどれも面白いので、読む本を探している時にはとても助かります。また、姉も私が教える本を「どれも面白い」と言ってくれるので、嬉しく思っています。おかげで最近、話の糸口が見つからないなどということはなく、逆に話しすぎて時がたつのを忘れてしまうほどです。私は、姉と自分の絆になつてくれた本に、とても感謝しています。

栃木県立足利南高等学校 二年 女子

今まで読んだ私の本について

小さなころから読み聞かされた物語は、気付かぬうちに覚えてしまっているものです。みなさんも身に覚えがありませんか。

例えば、『シンデレラ』。継母と義姉に虐げられながらも王子様と出会い、恋をし、幸せをつかんでいく女の子の物語です。一度は聞いたことがあると思います。他にも、『白雪姫』や『赤ずきんちゃん』、『浦島太郎』、『桃太郎』

などのグリム童話や昔話、いつの間にか知ってしまった物語ばかりです。私たちは知らず知らずのうちに本との出会いをしているのです。

特別印象的な本との出会いといわれても、特にある訳ではありません。しかし、母に勧められて読んだ本や興味が引かれて読んだ本など記憶に残っているものです。その中の一つを簡単ですが少し紹介させて頂きたいと思います。去年の読書感想文を『GO』で書いたのですが、私はこの本を映画で観ていました。一時、話題になったのですが、知っていますか。

主人公である男子高校生は、日本人と朝鮮人との混血なのです。ただ朝鮮人であるというだけで差別され、区別されるのです。そのことに憤りを感じ、葛藤する様子は読者である私たちにひしひしと伝わってきます。

本は不思議もので、作者の考えや強い想いが長い時間の果てに一冊の本になるのです。一種の伝達方法であり、最も理解してもらえらる手段であると私は最近思います。私は本が大好きです。

ミステリー小説、SF、ファンタジー、恋愛小説、エッセイなど種類は様々ですが、その一つ一つに作者の思いが込められている事は変わりません。それをどう受け取るのかは読者である私たち個々にかかっているのです。何を訴えられているのかをきちんと理解し、その事を考えるのが大切な事ではないでしょうか。

本との出会いはすぐ隣に存在しています。たまたま立ち寄った本屋さん、目に留まった本、または私のように映画

を観て興味を持った本か、いつ、どこで、心に残る本に出会えるかは誰にもわかりません。もしかしたら通り過ぎてしまったかも。それでも私は一生のうちに一冊、心の奥に残る一冊を見つけないと思いません。

栃木県立小山城南高等学校 二年 Iさん

ありがとう

私たちには、生きていく上で乗り越えなければならぬ試練が必ず訪れる。その試練は人により異なり、乗り越えるまでの期間もさまざまだろう。そんななかで、わたしに課せられた試練とは、友人関係だったように思う。

高校二年のとき、私は友人とささいなすれ違いから絶交状態になってしまい、いつのまにかクラスでもひとりになつてしまったのだ。あの当時は、学校に通うのが辛くて、その空間から抜け出したいくて、ひたすら図書室に通っていたのである。そのような日々が続いていたある日のことだ。ある同級生が私の好きな作家の本を読んだらしく、「この本よかった。」とうれしそうに話しているのを発見したのである。次の瞬間、私はおもわずその子に話かけていた。「この本、おもしろいよね！」それから、その子とはすぐ

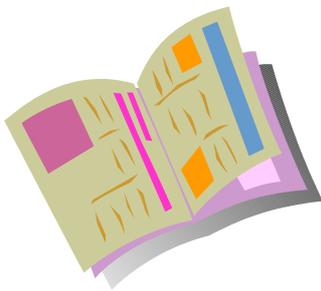
友達になることができ、図書室に通うのが楽しくなったのだ。それだけではない。その子の他にも本を通じたふれあいにより多くの友達も得ることができたのだ。

一度は本気で死のうと思ったこともあった私。けれど、今は生きていて本当によかったと心から思う。これも、たくさん本や友人たち、司書の先生がいてくれたからだと思う。そんな人たちに、今心からお礼を言いたい。

「ありがとう」

私は、人生は出会った人によって決まるのではないかと思う。一瞬視線が合ったただけの人との出会い。本を読んで作者の考えに触れるという出会い。出会いかたは人によつてさまざまだろう。しかし、私はそんな一瞬の人との出会いも、作者の考え方に触れる出会いも大切にしたい。偶然的引き合わせを待っているだけでなく、積極的に出会いを探したい。もし失敗したとしても、それを恐れずに前に進む人間になっていきたいと思う。そして、ひとりでも多くの人と出会い、かけがえのない仲間を増やしていきたい。

県南女子高 三年



雨が好きになつたわけ

村雨、桜雨、花の雨、時知る雨、七夕流し、雨夜の月、雨夜の物語……様々な雨たち。

雨が降ると、世界が色付きになると思う。雨の一粒一粒が、それぞれ物語を作っていく。雨に濡れて緑が濃くなる木々、まるで雨の足跡であるかのように波紋が広がる水たまり、雨に洗われて輝き、見るものすべてを映し出す道路。世界をオレンジのライトの色に染める夕方の雨や、柔らかい光の中で静かに降る暁の雨。雨はさあつとやつてきて、瞬く間に世界を変えてしまふ。私が見ていた世界のつづきを美しく、思慮深く彩つてくれる。

悲しい時も苦しい時も、嬉しい時も、雨はいつだって隣に寄り添ってくれる。ただ黙つて、すべてを受け入れてくれる。心の底までしみ込んだ雨は、ゆっくりと静かに去っていく、心の糧や教えを残していくのだ。

帰ろうとする人を引きとめるかのように降り始める雨を「遣らずの雨」、もしかしたらこの雨は、私のまわりにだけに降り落ちてくるのでは、と思う雨を「私雨」という。雨は天からの授かりものであって、それは天使のように感情を持ち、優しさや労りや、寂しさを抱いているのではないかと思う。私は全身で、こよなく雨を愛しているから。しかし、かつて私は雨を苦手としていた。スポーツ少女だったため晴れが好きで、雨を疎ましくさえ感じていた。そんな私を変えたのは、一人の女性作家である。江國香

織、私は彼女からたくさん事を教わった。雨が美しいこと、夕方や夜明けのすばらしさ、恋がいかに暴力的で愚かで甘やかなものか、そして孤独と絶望のこと。

彼女は、自分の好きなものを大切にしている。雨だけでなく、早朝のパン屋、昼間公園で読む推理小説や、ワイルドなマッシュルームを食べられる青い廂のレストラン、月夜に飲むとろりとした甘いお酒、それから天。好きなものたちに囲まれている彼女の暮らしは、とても有意義で魅力的だ。

彼女は自身の小説に、自分の好きなものばかりを登場させる。だからいつだって彼女の本は魅力的で、周りのささいな事から好きなものを見つけるすばらしさを、私に教えてくれる。彼女の本を読んでから、私の世界が色付きになったと思う。まるで雨のように浴びせられる不思議な魅力で、私の世界のつづきが彩られているから。彼女と同じ景色の中に住んでいるのだから、彼女のように色んなものをあらゆる角度から見えて、好きになりたいと思つたから。

私が江國香織と出会い、雨を愛することを知つたように、多くの人が自分に合う本を見つけ、自分なりの教訓を見入出してくれるといいと思う。どんなものでもいい、たった一冊のお気に入りがあれば、人生はずっと豊かになる。自分だけに通用する視点で世界を見つめ直し、新たな発見をすることが出来る。人生をきつと、自由に感じられるだろう。自分に本当に必要な一冊を、見つけ出して欲しい。それは、あなたの幸せへの鍵となるから。

栃木県立小山高等学校 二年 Aさん

読書会に参加して

私の通う男子高には一年に一回程度、近くの女子高と「合同読書会」という行事が開催される。決められた日までに指定された本を読んで、決められたテーマのもとで意見を交換するものだ。私は一年生の時にこの合同読書会に参加したが、実に有意義な時間が過ごせたと思っている。なぜなら、それに参加したことによって他の人との交流が広がっただけでなく、自分が今まで疑問に思っていたことが解決できたような気がしたからだ。

私が参加した時は宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』が指定された本だった。この本は以前、私が中学生の時に一度勉強したことがあった。その時は、恥ずかしさに負けて、疑問に思っていたことをわからないままにしておいたのだ。その時は疑問点を聞かなかつたことを後悔した。読書会に参加することが決まったときにこれはよい機会だと思い、その時の記憶を思い出しながら読書会に備えた。当日になると想像していたことだが、緊張した。それは、見知らぬ人たちがいたからか、それとも普段あまり目にするこの女子高生がいたからかは今になって考えてみてもわからない。ただ、鮮明に覚えていることは、緊張とともに何らかの知的興奮を感じていたことだ。

読書会のほうはとても印象深かった。数人のグループに分かれて、意見の交換を行ったのだが、どの人もそれぞれの考えがあった。考えてみれば当たり前のことだが、この

ときには改めて実感させられた。最初は、ほとんどの人が遠慮をしまつて、あまり盛り上がらなかったのだが、少しずつ話が续くようになった。意見の中には協調できるものもあれば、反対に反発を感じるものもあった。また、思いもよらない意見も出た。先ほど、わからなかつたところがあつたと書いたが、それは「何故、『銀河鉄道の夜』は最近出版された本のように感じるのだろうか」ということだ。話の中には黒曜石やダイヤモンドといった語句が出てきて、宮沢賢治が生きていた時代とは思えないほどなのである。それが、中学生の時の私では理解ができなかつた。

疑問に思っていたことを質問した時、どのような答えが返ってくるのかと期待や不安などいろいろなものが心の中にあつた。すると、女子高生の一人がこのように答えてくれた。「当時の宮沢賢治は西洋文学に興味をもつていて、それを取り込んだのではないのでしょうか」その答えを聞いたとき、私は心の中にあつた疑問が少しだけ解けたような気がした。その答えは完全なものではなかつたかもしれない。しかし、その時の私にとっては十分すぎる答えだったので。その後にはあつという間に時間が過ぎてしまつた。

この経験は私にとつてとても充実したものだ。女子高生と話せたということもあつたが、読書会に参加したことによつて様々な人と出会えたことが何よりも大きいものだと思つている。そこでは、自分の考えたことが他人と話し合うことによつて、深まつただけでなく、ある一つの作品についての意見を交換することによつて、相手のことを理解することができた。さらに、他の人との触れ合いが、

私の人間的な見解の視野を広めてくれた。先生の話だと、大人にも読書会というものがあり、それは学術的なものもあれば、趣味のものもあるらしい。しかし、どんな読書会でも変わらないことが一つだけあると私は思っている。それは、読書会という場で、一つの本がいろいろな人たちとの触れ合いの場となるということだ。私はこれから機会があれば積極的に読書会に参加していきたいと思う。

栃木県立真岡高等学校 二年 Oさん





絵本の力

一歳児クラスの新学期が始まって二日目のことです。その日は、持ち上がりの私と新人の保育士とで、ゼロ歳児クラスからの進級児五人の子どもたちをみていました。まだ、新しい保育士になじめず、おむつ交換も着替えも私のところに来てしまう子どもたちでした。

食事が終わって、自由に遊んでいるとき三人の子どもが本箱の前に座って、絵本を開いて見ていました。ゼロ歳児の時から絵本に親しんでいた子どもたちで、絵本は大好きです。私はその姿を見て、若い保育士に、「絵本を読んであげて。」と、頼みました。一冊二冊と読み続けていると、おむつ交換も着替えもさせようとしなかった子どもたちが、その若い保育士にだんだん近寄ってきて、膝に乗って抱っこされているのです。安心して体を保育士にゆだね、絵本を読んでもらっている子どもは、一生懸命読みながらも、うれしそうに若く保育士の顔。その光景を眺める私は、「これが絵本の力なのか!」と、感動していました。

おおつか保育園（栃木市） Hさん

母から子へ・絵本をとおした家族のつながり

私が子どもの頃は、絵本を見るとか読んでもらおう等という事にはあまり関心がなかった様に記憶しています。保育所に一年間通った時には、先生が、毎日紙芝居を見せてくれた事をよく憶えています。中でも『さるかに合戦』『親指姫』『かちかち山』等の古くからのものがほとんどでした。そんな毎日の生活の中で私が楽しみにしていた事が一つあります。それは、母が寝る前に、布団に横になり、私たち三人の子どもに毎晩同じ話を聞かせてくれたことです。そのお話は、今でもよく憶えています。母が話してくれたたとりに話す事ができます。私が大人になつてから知った事なのですが、その話は、絵本にある話だったので。『へこきよめさま』というお話で、どうして母がその話を知っているのか不思議に思い、聞いたところ、祖母に教わったという事でした。そんなに古い話が絵本になつている事を知り、またそれを母から毎日聞かされて、眠りに就いた頃の自分を今思うと、祖母から母へ、母から子へと伝えてもらったことに幸せを感じずにはいられません。あの当時は、母も私たちもその話が始まるともうおもしろくて大笑いでした。絵本はなかったけれど母の話には、暖かいぬくもりがあり、絵本を読んでもらっている様でした。毎日何かしらの話を聞かせてくれた母に今でも感謝しています。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる（河内町） Sさん

絵本との出会い

ノントンシリーズは、私の好きな絵本で絵もかわいくて内容もわかりやすく子どもたちも大好きです。この絵本『ノントンぶらんこのせて』にでてくる光景は、保育園にもよくある光景です。ブランコを一人じめして、他のお友達も乗りたいのにブランコを貸してくれないで一人で乗っている様子が描かれています。園でもブランコの数は三つしかなく、みなとても喜ぶ遊具の一つでした。室内から外にでた時に、一目散にブランコに走っていき乗っている子が何人かいました。最初に乗った子はずっとブランコに乗っていて「順番だよ」と言ってもなかなかブランコを貸してあげられない状態でした。そんな時出会ったのがこの『ノントンぶらんこのせて』で、待っているお友達が乗っているお友達のブランコの数を十数えて、最後に「おまけのおまけのきしゃポッポ」と鳴ったらかわりましょう」の合図で次のお友達にブランコを貸してあげるといってお話でした。そのお話のように乗っているお友達のブランコを数えていると待っているお友達もあきずに「おまけのおまけのきしゃポッポ」と鳴ったらかわりましょう」と言って待てるようになり、ブランコに乗っているお友達も十回乗っておまけがついたら、交替するんだとわかるようになりました。ブランコも楽しみながら交替して遊べるようになりました。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる(河内町) Iさん

絵本について

私が小さい頃から両親はよく絵本を読んでもくれました。母がよく「私が三人の子を抱え、保育園の仕事と家事をしている中で、我が子にしてあげられたと胸を張って言える事は食事(特に朝食)をきちんと作ってあげた事と絵本を読んでもあげた事。」と言っているくらいで、幼な心にも、夜寝る前に眠りそうになりながら絵本を読んでもくれた両親の姿が記憶に残っています。私が一番記憶に残っている絵本は、『ピーターラビット』。かこさとしさんの『ニンジン畑のパピペポ』や『おたまじゃくしの一〇一ちゃん』等もよく覚えていました。

今、大人になってみて、実感はありませんが、自分の想像力や表現力、情操等の面で、それが生きているのかなと感じる事があります。また、今現在、本が好きなのは、小さい頃に両親がたくさんの絵本を読んでもくれたお陰だと思えます。

先日、作家の柳田国男さんのお話を聞く機会がありました。「絵本は、読み聞かせ肉声を通し気持ちや感情、表情を伝えるコミュニケーションである。」「大人でも絵本を読む事によって、忙しさを忘れていた感性がよみがえってくる。心が再生する。」という話が、とても印象深く残りました。

今後自分も園児たちと一緒に絵本を読みながら、園児たちの心と自分の心にも様々な感性を伝えていきたいと思えます。また自分が子どもを持ったら、私の両親の様に絵本をたくさん読んであげたいと思います。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる(河内町) Yさん

伝えたい絵本

私は、絵本が大好きな子どもだったと、母から聞かされたことがあります。今、思い出してみても、絵本を読んでもらったという記憶が全くといっていいほどありません。しかし、一冊だけ何度も何度も喜んで読んでいた絵本を覚えています。それは「ノントン」の絵本です。この本だけが記憶に残っていることが不思議でなりません、それだけ大好きな絵本であったのだと思います。この「ノントン」シリーズの絵本は二冊ありました。表紙がピンクなのは私、赤は妹。私はそのように自分の絵本を表紙の色で区別していました。一人一冊買いつけてもらったおかげか、このピンクは私の絵本なんだ、という思いが強くありました。妹と同じ、ノントンの絵本。だけどこのお話は私だけのもの、ということがとても嬉しく、そのことがこの絵本を大好きにさせてくれたのではないかと思います。

そして今、保育士となった私は、自分の感じた思いを子どもたちにも感じてもらいたいと思い、大好きなノントンの絵本の読み聞かせをよくします。初めて子どもたちにノントンの絵本を読んであげた時の子どもたちの反応が、とても印象深く残っています。絵本を見せたたん、子どもたちのざわつきがおさまり、嬉しそうな目をして絵本に注目していました。自分が子どもの頃好きだった絵本を、今の子どもたちも同じように好き、と感じていることがとても嬉しく思えました。「読み手の、この絵本が好き、という気持ちは聞き手に伝わる」とおっしゃっていた方がいました。自分が絵本を読んで感じた思いを、これから絵本を通して子どもたちにも伝えていければいいな、と思います。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる(河内町) Kさん

絵本への思い

私は幼かった頃、毎晩寝る前に母親に絵本を読んでもらっていました。特に「ねないこだれだ」や「ぐりとぐら」は、お気に入り、絵本の内容を覚える程まで、読んでもらっていました。

現在、私は保育士として子どもたちに絵本を読んでいます。私自身、絵本を読むのも見るのも大好きなので、絵本と関わっている時間は、とても楽しいです。不思議なことに、絵本を読んでいると幼かった頃と同じ気持ちに戻れるような気がします。子どもたちも絵本を見ている時は、その絵本に入り込んで物語を楽しんでいるようです。また、落ち着いた表情も見せてくれます。

今日、ビデオやテレビを長時間視聴している子どもが沢山いるようです。だから、保育園にいる間は、様々な絵本を子どもたちに読んであげ、絵本の楽しさ、おもしろさを伝えられたらと思います。

こうして私が絵本に親しみを持てるのも、母親のお陰だと思っています。今、私たち姉妹が読んだ沢山の絵本は押し入れに入っています。私が将来母親になった時には、自分の子どもにも沢山の素敵な絵本を読んでもらいたいと思います。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる(河内町) Aさん

絵本と出会うことで

日常の保育の中では朝の会、午睡前、帰りの会、または板橋先生がいらしてお話や絵本の読み聞かせをして下さる「お話聞かせて」という日があります。

そのため保育士が絵本を持って部屋に入ると今まで遊んでいた子どもたちが、自然と保育士の周りに集まり「今日は何のお話だろう」という期待の眼差しでこちらを見ています。

楽しい話の時には笑みを浮かべたり、少し怖い話や悲しい話の時には眉間にしわ寄せ心配そうな表情をしながら聞いていました。保育士が声色や声に強弱をつけると子どもの集中力も高まり、より色々な反応が子どもたちから見られて私自身も絵本の読み聞かせを楽しんでいます。

昨年に三歳児の劇の練習にと毎日読んでいた『おおかみと七匹の子やぎ』も一緒にお話をくり返し聞いていた二歳児の子が「トントンお母さんですよ。」などのセリフを覚え、戸外遊び中に劇遊びを楽しんでいる姿が見られました。そして飽きることなく、

「おおかみがいいよ。」
と言つて同じ本をリクエストする子どもたちに、絵本から受けるイメージや印象は大きいんだなと感心しました。

今のTV世代の子どもたちは、就寝前までTVからの音や強い光の刺激を受けている環境の中で育てられている子が多い様ですが、同じ物語にしてもTVからの「音」ではなく「声」を絵本を通してもつと聞かせてあげて欲しいと思います。

私の母が昔「絵本を読んでもとすぐ寝ちゃうよね。」と言っていた事があり、子どもながらに悪い事をしたなと思つた時も

ありましたが、保育園に勤めてからは、それは自分にとって心地よいと感じていたからなんだと知ることができました。私がかつても日常生活においても母の「声」が好きだと感じるその背景には、絵本を通して親子の関係を経験してきているからだと思います。

もし、子どもと一対一でおもちゃを使って遊ぶ時間があればおもちやを絵本に代えて、ひざの上に抱っこしながら一緒に見たいと思います。絵本を通して二人だけの空間を作ること十分なコミュニケーションもとれ、母の声を心地よいものなんだと感じられる環境が増えていつて欲しいです。

絵本を取り入れた保育の中で大きく変わったなと思うことがあります。

それは、昨年は「お話聞かせて」の時間にうわの空だったり、後ろでさわいでみたりと落ちつかない子たちがいましたが、今では自ら一番前に座りじつと集中してお話を聞いている姿が見られるようになりました。同時に人の話もきちんと聞けるようになり、毎日の絵本を通じた生活のくり返しの中で、自然と「聞く耳」が身に付いたのだと感激しました。

保護者の方からは「ひらがなが読めるようになったけど保育園で教えているのですか。」などの声もありました。練習帳などの教材を用いるよりもたくさんさんの事を楽しみながら学ぶことができる絵本は子どもたちが成長する中で大切な教材に代わるものだと思います。

これからもたくさんさんの絵本に子どもたちが出会えるようにしていきたいです。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる(河内町) Nさん

絵本の読み聞かせから

絵本、それはいろいろなものを与えてくれる素敵な世界だと思う。

私は幼い頃、母親が毎晩寝る前に絵本を読んでくれた。今でも絵本を読んでいる時の母親の優しい口調を覚えている。私は絵本によって母親の優しいぬくもりを感じる事ができた。

日々子どもと接する中で、子どもと絵本のつながりについて様々なことを感じ始めた。

午睡前、毎日必ず読んでいた絵本があった。そのなかで登場する雲が「でんでら、でんでら」と話す場面があった。繰り返し読んでいた中で子どもたちはその言葉を覚え、雲の絵を見ると、「でんでらいたよ。」

と言うようになった。

また、電車の絵本に「がったん、ごつとん、ピーポッポー」というフレーズがあった。すると子どもたちは遊びの中でそのフレーズを取り入れるようになり、ブロックで電車を作っては、「がったん、ごつとん、ピーポッポー」と言いながら電車を走らせていた。

これらの体験から、子どもたちは絵本から豊かな表現を身につけているのだと強く感じた。

絵本は言葉を身につけていくためにとても大切なものであり、さらに豊かな感情を身につけるためにも必要なものだと思う。そして保育の現場にたつ者として毎日かかさず読み聞かせていきたいと思う。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる(河内町) Yさん

私が一番好きな絵本

私自身が、今までに出会った絵本の中で、心に残る絵本は、数え切れない程、沢山ありますが、「どれが一番？」と問われると、迷うことなく、「ぐりとぐら」を挙げたいと思います。

学校を卒業してから(もう三十年以上も前の事となりますが)初めて、保育園者として出会った本で、私自身、この絵本を手にした時、とにかく、赤と青のおそろいのズボンをはいた野ねずみの、ぐりとぐらの可愛らしさに、心を奪われてしまいました。また、森の中の、草や、花や、動物たちの姿に、何ともいえない親しみを覚えました。

ページをめくっていく度に、森の中で、真白な大きな卵を見つけた二匹の野ねずみたちが、次に、どんなふうになつていくんだろうかと、心がワクワクし、だんだんと心がぽかぽかと温かくなつて来て、その当時、若かった自分が絵本の世界の中に入り込んでしまったという様な記憶があります。

「ぐりとぐら」「ぐりとぐら」と言う言葉のくり返しも、リズムがあつて楽しくて、あの時の子どもたちも、目を輝かせ、耳を澄まして、じーっと見入ってくれていた様に思います。そして、子どもたちの帰った後、自分の受け持った教室の壁紙に、ぐりとぐらのお話の中から、好きな場面を、一生懸命真似て描き、飾ったことを思い出しました。

私自身、大好きなお話の絵だったので、自分なりにとても満足し、子どもたちからも、

「先生、すごく可愛いね！」と喜んでもらうことができました。

遠い昔の事です、今でも私の心の中でほのかに息づいてい

る絵本にまつわるエピソードです。

あの時の子どもたちも、お父さんお母さんとなって、自分の子どもたちに、自分の受けた感動を次の世代へと伝えていくてくれたら、どんなにすばらしい事でしょう。

絵本が与えてくれる、夢や、希望や、感動を、これからも、子どもたちと一緒に楽しみながら、私自身も心を豊かに膨らませていきたいと、そう心より思います。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる(河内町) Mさん

Y先生の思い出

Y先生は私が小学校四年生の時の担任でした。いつも手遊びを教えてください、クイズを出してくれたりして、楽しく授業をしてくださいました。その一方では社会に目を向けるために、よいテレビ番組をどんどん見るように勧めたり、日記指導を通して、「ものの見方・感じ方・考え方」を指導したり、児童のやる気をうまく引き出してくださいさる先生でした。

そんなY先生が特に力を入れていたのが読書指導です。先生の「読み聞かせ」や、「ブックトーク」が今の私に大きな影響を与えたように思います。先生が読み聞かせをしてくださった本のなかで、『千葉省三』が心に残っています。省三は明治二十五年生まれ、子ども時代、私の郷土である鹿沼市に住んでいた童話作家です。以前、省三の作品『鷹巣取り』や『チツクとタ

ツク』は小学校の教科書にも載っていました。Y先生は省三の童話の中に出てくる鹿沼弁で生き生きと朗読し、私たちを童話の中に引き込みました。また、実際の童話の舞台(鹿沼市榎木町)にも連れて行ってくださいました。先生の影響を受け、小学校の教師になりたいと思った私は、十三年後その夢を叶えました。

教師になってからも、私はY先生のご指導を毎日のように受けました。なんと先生は私が赴任した小学校の教頭先生だったのです。「世間は狭い！」そう思いました。

四年前、私は鹿沼市立東小学校で四年生を担任しました。社会の授業では、郷土の文化に尽くした人として「千葉省三」が取り上げられていました。「私たちの鹿沼市」という副読本にはY先生の似顔絵がのっついて、「千葉省三研究者Y先生のお話」とありました。「へー、Y先生って有名なんだ。」と思いました。担任していた子どもたちにY先生のことを話すと「ぜひ、Y先生の授業を受けたい。先生お願いして。」と言います。Y先生は当時、校長先生を経て退職されていました。百二十名の児童に校外で三日間に分けて授業を行うのは簡単に実現することではありませんでした。しかし、どうしても自分が味わった感動を子どもたちに味わわせたいと思い、いろいろなハードルを乗り越え、Y先生を迎えた「千葉省三のふるさとを尋ねて」という授業が実現しました。四年生は三クラス百二十名でした。先生は「どんなに多くても一クラス単位でなければ授業をしない。」とおっしゃって、三日間子どもたちといっしょに路線バスに乗って榎木町の現場まで行き、省三のふるさとを案内してくださいました。私が子ども時代に経験したような忘れられない授業になりました。Y先生は最後に、『とらちゃん日記』という童話に出てくる橋のふもとで、童話の一部を読んでくださ

いました。「とらちゃんはどうちから来たんだい？」Y先生の質問に子どもたちは目を輝かせて、「あっちー」と指さしながら答えていました。私はこの時の子どもたちの生き生きとした表情が、今でも忘れられません。

次の年、Y先生は急にお亡くなりになりました。お葬式の日、当時五年生になっていた児童百二十人、ほぼ全員がY先生に手紙を書いてきてくれました。「先生の授業が忘れられない。もっといろいろ教えて欲しかった。」子どもたちの思いは私の思いでもありました。

私は今でも、まだ先生が生きているような気がしてなりません。バイクに乗って突然現れ、自分の研究の話を始めるような気がするのです。私に本のすばらしさを教えてくれたY先生、本当にありがとうございます。

宇都宮市立富士見小学校 Tさん



本を通したいろいろな人との出会い

二年前に『きいちゃん』という本を通して、作者山元加津子さんとふれあいができました。障害があっても前向きに生きている主人公の姿に感銘し、その思いを、作者におたよりで伝えました。また、その本を子どもたちに読み聞かせたり、保護者

に学校だよりで紹介したり、友だちに本をプレゼントしたりしました。

作者に手紙を出して、一週間後、なんと、その作者から心温まる返事をいただき、感激しました。

そして、今年六月、その作者が、馬頭町で講演会をするということを新聞で知り、その町まで、講演を開きに行き、講演後、作者と話をすることもでき、また、感激しました。一冊の本を通して、このようないろいろな人との出会い、ふれあいができることは、偶然ではないような気がします。私にとってこの本は、宝物のように大切なものです。

これからも、感動した本をいろいろな人に伝えたり、感想を伝えあったりして、本を通した心のふれあい、つながりを深めていきたいと思えます。

足尾町立足尾小学校 Mさん

読み聞かせから広がった

国語の教員としての願いの一つは、本の好きな子どもたちを育てることでした。そんな私の心に残る出来事が、育児休業期間を終えて復帰半年ほどの頃がありました。

教材のあとには、時間が許す限り関係する物語の読み聞かせをしたり、プリントにして渡したりと、出来るだけ子どもたち

に本の世界を広げようと努めていました。それは、中学一年生の教室でのことでした。

二期の戦争教材の学習後、いつもと同じように、物語の読み聞かせをしました。野坂昭如の戦争童話集から『凧になったお母さん』の読み聞かせでした。

「昭和二十年、八月十五日」で始まる十二の物語の一つ。子どもに水分を与えるためにみずからは干からびてしまうお母さんの話。

教科書で読み取った様々な思いを、この読み聞かせから子どもたちが感傷や感動だけではなく、戦争の悲惨さや無意味さを新たな課題として受けとめてくれることを願って、また、時間的にもちよūdよい長さだったから選んだ物語でした。この胸をしめつけられる物語を子どもたちの前で淡々と読み終えるはずでした。感情を過度に入れない方が子どもたちに伝わるものが大きいはずと。

ところが、読み進めていくうちに声が震え、言葉がつまり、どうしても先に進めなくなってしまうのです。始めのうちこそ気を取り直して、先に読み進もうとしていたのですが、嗚咽おえつになってしまつて、読み聞かせからは、ほど遠いものになってしまいました。しーんと静まりかえつた教室。息を詰めて私を見守る子どもたち。どれほどの時間が経つたのか、短いとも長いともいえない時間が過ぎていきました。と、その時、一番前の席にいた男子生徒が、つと立ち上がり、私の手からその本を静かに引き取りました。そして、落ち着いた声で、物語の続きを読み始めました。声にはならなかつたけれど、フーッとホーッともつかない安堵の息が子どもたちの口から漏れました。私は涙したまま、その子の読む物語に聞き入りました。訥々とつとつとした音読でした。ですが、その子が読み終わったとき、誰から

ともなく拍手が起りました。

「ありがとう。ごめんね、最後までちゃんと読んであげられなくて。でも、君が読んでくれて、よかつた。本当にありがとうね」と言う私に、席に着きながら、その子は「K先生は、お母さんになつたばかりだから、かつちゃん（主人公の幼い男の子の名前）が自分の子どもと重なつたんだね。」とつぶやきました。うん、うんと頷く子どもたちが何人もいました。

本当は、戦争のもつ悲惨さや無力感、絶望感、そんなものを感じ取ってもらいたかつたのですが、このことで、母親の子どもを思う気持ち子どもたちの胸に刻みこまれたようでした。どの子どもどの子どもみんな同じに、お母さんから大切に慈しまれて育ててきたのだと、子どもたちは感じとつていたように思われました。

そして、学校図書館では、その後しばらくの間、『凧になったお母さん』の貸し出しが増えました。また、これ以後、教材の後にする読み聞かせも、子どもたち自身が読んだり、子どもたちが探してきてくれて紹介したりすることも出てきました。

本当に遠い昔のことですが、今もなおこの日のことは、私の中に鮮明に残っています。



中学校教諭

心の交流

「ねずみさん、どこにいるかな？」

こんな言葉から、私の初めてのブックトークが始まりました。私の勤めている学校では、月に一度、教職員やボランティアによるブックトークが行われています。初めてのブックトークで割り当てられた学級は、情緒障害児のクラスでした。事前に担任や司書教諭にアドバイスをいただきました。『7ひきのねずみ』という絵本の読み聞かせを行いました。文章はあまりなく、絵がメインの絵本。彼らにとっては、何度も読んだことがある本だったのですが、目を輝かせ、身を乗り出して聞いてくれました。いつの間にか緊張もほぐれ、とても楽しいひとときでした。

私は、これまで、読書は一人黙々と行うものという印象が強く、自分と本の一对一の世界であると思っていました。しかし、今回の出来事は、そんな私を大きく変えてくれました。実際に、私は、この本を通して普段接することが少ない彼らと交流し、とても楽しい時間を共有することができました。

たくさんの本に出会った子どもたちの頭の中には、記憶の引き出しがあり、そこには、本の世界に登場した数々の色や形、生き物、その他いろいろなもの शामिलされているそうです。この記憶の引き出しが、子どもたちの成長に大きく影響すると言われています。生徒の身近にいる私たちにできることは、ただ、「本を読もう」と言うのではなく、ブックトークなどの活動を設け、生徒にあった本を紹介したり、本を読むことの楽しさを伝えたりすることではないでしょうか。そして、そんな私たち大人の引き出しにも、たくさんの本の思いつきとともに、読み聞かせをした思いも加わって、人生を豊かにしてくれるのかもしれない

せん。

今後、私に割り当てられたブックトークはあります。このクラスの生徒たちは、どんな本に興味があるのだろうか？ 話せば興味を持つてくれるのだろうか？ 疑問や悩みは尽きません。けれども、本を媒介として、たくさんの生徒と交流していきたいと思えます。

矢板市立矢板中学校 Tさん

それぞれの『道ありき』

「行動面で注意を要する生徒である。」一年次の担任から引き継がれたA子評である。しかし、実際の彼女は素直でひたむきな生徒であった。ただ、人に合わせようとして精神的に疲れしてしまう傾向があった。彼女は、担任である私の所へよく相談に来た。ある日、私は彼女に三浦綾子の『道ありき』を貸してあげた。以後、三浦綾子の作品は彼女の愛読書になり、受験勉強が本格化するまで、私のもとに本を借りて来ては、作中の人物や生き方について話していった。

A子は英語が得意で、有名大学の外国語学部への進学を希望していた。彼女は元来まじめで、校内の学業成績は良好だったが、校外の模擬試験の成績は概して振るわず、懸命に受験勉強に取り組んでも志望校との距離は縮まらなかった。英検も二級

にもう一步で届かなかった。外国留学等のシステムで英語に力を入れていたB大学の関係者が、学校までスカウトに来たこともあった。彼女は推薦入学の条件や留学に魅力を感じつつも、本来の志望校を受験することにした。しかし、受験本番が近づくとつれ、ストレスから体調を崩してしまった。

そして三年生の二月。次々に届く不合格通知にA子は心も体も疲れきって、ついに志望校での受験の最中に倒れてしまい、合格通知を一つも手にしないまま入院してしまった。ようやく退院した彼女に、私はC大学国際関係学部の三月入試の受験を勧めた。前年に行われたC大学の説明会で、私はD教授の話を知っていた。D教授はフィールドワークを重んじた教育を行い、論文コンテストでは、世間で一流といわれる大学以上の受賞者を輩出していた。私はD教授ならば生徒を安心して預けることができるかと確信し、説明会の翌日のホームルームでそのことを生徒に熱弁していた。しかし、C大学は本校の生徒にとつてはいわゆる滑り止めで、積極的に受験する生徒は稀だった。現役合格が条件のA子は、試験日程が重複する有名女子大との受験に願書締め切り日まで迷った末に、C大学の受験を決意し、ようやく合格通知を手にする事ができた。

大学生となったA子は、しばらくして新生活についての便りをくれた。私が勧めたD教授のゼミに入ったこと。優秀な先輩に刺激されて勉学に励んでいること。順調な学生生活の出發を知らせる内容に、私は安堵した。

その年、平成十一年の十月、三浦綾子世界のニューヨークが報じられた。数日後A子から久しぶりに手紙が届いた。手紙は、ニューヨークを聞いて、高校時代に三浦綾子の本を紹介してくれた私を思い出したと始まっていた。作品から生き方を学び、今でも辛いことがあると『道ありき』を読み返すとあった。近況報告

には、学内で開催される「高校教育」についてのシンポジウムで、パネリストとして発表することになったとあった。発表では、自分がよき師やよき友、充実した授業や学校行事等に恵まれて過ごすことができた高校生活を、理想的な高校教育の例として語るとのこと。さらに、留学の学内選考試験にトップで合格し、奨学金を支給されてイギリスに留学することになったとあった。しばらくは不本意入学に鬱々としていたが、今は充実していると手紙は結ばれていた。

『道ありき』を心の支えにして、挫折を乗り越えて懸命に自分の道を生きようとするA子の姿と、本の持つ力の大きさに心打たれた。A子にとって幸多き『道ありき』であることを陰ながら祈る。

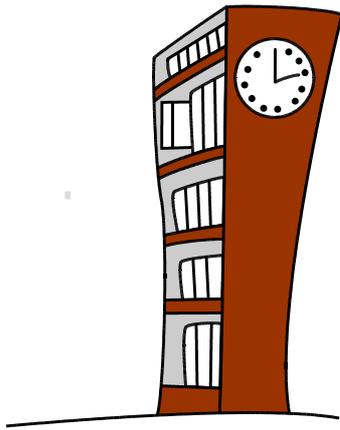
高等学校教諭

思い出

以前、自分の母校である高校を訪れる機会があった。その際、図書室を拝見させていただいた。私は高校在学中に本屋では文庫本などをよく買っていたが、高校の図書室で本を借りるということを一切しなかった。図書カードなるものは、真っ白であった。図書室には出入りするものの、「この図書室の蔵書数はすばらしい」などと先生から聞くと、「こんな所で借りるものか」などとすねていたのかもしれない。何をそこまで意地にな

つていたのかと思いつつ、書架を眺めていた。その時「T文庫」というものがあることに気付いた。Tとは、私が在学中に国語を担当されていた先生のことである。T先生は私が高校を卒業した後、高校在職中に亡くなられたということであつた。その先生の遺族の方が高校に寄付された一群の書籍を、「T文庫」と名づけ開架しているという。それらの本はT先生ゆかりの本ではあるが、それらの本を通しての思い出があるわけではない。しかし、不思議なものである。そこにある本を見てみると、これらの本はさもT先生らしい本であるなあなどと思われてくるのである。

私たちは、小説などを読むと登場する人に思いを馳せる。古典などを読むとこれを書いた人にも思いを馳せる。しかし、それらの人ばかりではなく、本として存在しその存在と関わった人にも思いを馳せる。母が子に本を読み聞かせれば、子は母を思いながらいつかその本を読み返すだろう。そう考えると当たり前の事ながら、本が持つ人と人を結びつける力に今更ながら気付かされる。「ものより思い出」などということも聞くが、外に出かけるだけが思い出作りでもない、なども思えてくるのである。



高等学校教諭

本の贈りもの

「やっぱり先生だ。」

その日は、看護婦をしている妻の職場の歓迎会の日だった。妻を歓迎会の会場まで迎えに行った私は、突然妻の同僚の一人からそう声をかけられた。よく見ると懐かしい顔。私がまだ大学院生で非常勤講師をしていた頃、県内のある女子校で教えた生徒だった。

「奥さんから名前を聞いて、先生じゃないかって思ってたんです。」

六年ぶりの再会に、ほんのちよつとの間ではあつたが昔話に花が咲いた。

高校で教えていたといつても、一年生二クラスの授業を週に二時間ずつ受け持つだけの非常勤講師であつたから、ほとんどの生徒の顔も名前もよくは覚えていない。それなのに、なぜその声をかけてくれた生徒のことはよく覚えていたかというところ、バレンタインデーにまつわるちよつとした思い出があつたからだ。

講師の任期ももう少しで終わりという頃、バレンタインデーに、その生徒から「義理チョコ」をもらった。当時、教員採用試験に合格し、四月から正式な教員としての生活が始まることばかりがわかっていた私は、何か教師らしいお返しをしないでとはとしばらくまじめに考え悩んだ結果、一冊の本を贈ることにした。灰谷健次郎の『わたしの出会った子どもたち』（角川文庫）という本だった。子どもたちと正面から向き合うことの難しさや大切さを教えてくれる本で、私が教員を目指すきっかけとなつた本のひとつでもある。ただ、今思えば、自分が感動した本だ

からという以外に、その本を贈る理由など全くなかったのだが。「先生からいただいた本を読んで、小児科で子どもたちの看護をするのもいいなって思っただけです。」

看護学校を卒業した彼女は、希望が叶って私の妻と同じ小児科に配属になった。今はまだ仕事を覚えるのに悪戦苦闘の毎日だが、子どもたち相手の仕事にとてもやりがいを感じていると言う。私の贈った本も、ちょっぴり役に立ったのかなと思った。



高等学校教諭

「舞姫」の朗読

私が前任校に赴任した時のこと。一年生の正担任ということから、授業は一年生中心に持つこととなったが、一クラスだけ三年生の現代文を担当することとなった。文科系の私立大学への進学を希望する生徒を中心とするクラスで、国語を得意とする生徒が多いクラスであった。新採から六年間勤務した別の高校では、文科系大学への進学を希望する生徒がいなかったため、

いきなり三年生の授業を持つというのは正直不安であった。

一週間でその不安は倍加した。「この子たちのほうが、自分よりずっと感性が豊かだ。もしかしたら、自分より読みが深いのではないか。こんな自分が授業を担当していいのか。」と。それからというもの、必死で教材研究に取り組んだ。生徒には負けられないとばかりに。さぞかし、肩に力が入った授業でもしるみのない授業だったと思う。

数か月過ぎてようやく力みも抜けた頃、森鷗外の『舞姫』を教材として扱うこととなった。第一時間目、私が朗読を続けていると予想もしない事が起こった。教室内の数力所から、塞き敢えぬ涙をこらえようとするかすかな声が聞こえたのである。精神を病んで暴れるエリスが、生まれてくる子どものために縫っておいた襦袢おしほを顔に押し当て、涙を流して泣く場面であった。この場面では、朗読者の私自身も胸詰まる思いを必死にこらえていた。

この時以来、「舞姫」の授業（朗読）で何人泣かせられるかが、私の授業に対する自己評価の尺度となった。明日は、『舞姫』の朗読』だという日には、書齋で朗読の練習を欠かすことがない。ある年、書齋で練習していると、妻が驚いた顔をして入ってきた。何かと思うと、「今、女の子の声しなかった？」と部屋の中を見回している。朗読の練習をしていたのだという。と怪訝けげんそうな顔をして出て行った。私は「これで明日も大丈夫だ。」とほくそ笑んだ。

高等学校教諭

大好きな一冊の絵本

小さい頃、好きだった一冊の絵本があります。でもその絵本の事は、大人になってすっかり忘れていたのです。幼稚園で先生に読んでもらったのかも、両親が買ってきてくれた本なのかも、まったく忘れていました。

その絵本の事を思い出したのは、あるドラマを見たのがきっかけでした。ドラマの中の主人公が大切にしていた絵本。その主人公はその絵本が大好きで、毎日持ち歩いてはつらい時、悲しい時、その絵本を読んでいます。『ぐるんぱのようちえん』その絵本のタイトルを聞いた時、「昔、よく読んだなあ。」と思いだしたのです。そして、小さい時の様々な思い出が頭をよぎり、懐かしさから、次の日絵本を探しに、本屋へ出かけていました。

その当時、私には二歳と一歳の娘がいたのですが、私とその絵本を見てみると、上の娘が私の所にやってきて、娘にはまだちよつと難しい絵本を横からのぞきながら、わかっているのかいないのか、熱心にその絵本を見ていました。今までにも、たくさん絵本を読んでいたのに、あまり興味を示さず、本をおもちや代わりに遊ぶ事が多かった娘が、意外にも強い興味を示したのです。それからというもの、この絵本をきっかけに、娘は絵本のおもしろさを知り、絵本を読む時間が増えていきました。ある時はママが娘をひざの上に抱いて絵本を読み、パパは二人の娘を両側に、布団の上に寝転がって読んだり、絵本を読む短い時間ですが、おしゃべりをしたり、親子の大切なふれあいの時間が持てるようになりました。

今でも、我が家では、この一冊の絵本が大好きです。姉妹で

取り合うので、やぶけてボロボロですが、テープで補修し、大切にしています。絵本を見る所から始まり、両親に読み聞かせてもらった時期があり、今では二人の娘も、自分たちで読めるようになりました。たった一冊の絵本から、様々な思い出がふれてきます。ママの大好きな一冊の絵本が、今では、家族皆の大好きな絵本、とても大切な絵本になりました。

野ばら幼稚園(石橋町)保護者 Iさん

絵本のマジック 父として、幼稚園教諭として

「絵本の読み聞かせ」というと、母親、あるいは女性がやるものというイメージがまだ強いかもしれません。でも、育児や保育に不器用な父親、男性にこそ、「絵本」という、手軽でリーズナブルな子どもとのコミュニケーションツールがあることに、もっと気付いてほしいと思います。

私は今でこそ二歳の男の子の父親で、幼稚園で教諭として仕事をしていますので、「絵本の読み聞かせ」は、毎日の日課になっています。しかし、以前はやはり、「忙しくて...」「なんか照れくさい。」といった理由でそれほど絵本に興味を持てませんでした。

幼稚園で最初の担任を持ったときも、たまに紙芝居を読むことはあっても、あまり絵本を手取ることもなく、まずは子ども

もたちと外で遊ぶことばかりに躍起になっていました。しかし、二学期が始まると、運動会を始めとする様々な行事の準備に追われ、なかなか子どもたちとゆっくり遊んであげられない日々が続いてしまいました。そこで、場所を選ばず短い時間でも子どもたちとコミュニケーションがとれるものは何かないかと考えていたある日、何気なく手に取った絵本を読み始めたところ、予想以上に子どもたちは、目を輝かせてじっと聞いています。ありませんか！読み進める間も、気になる場面があると、どんな私に話しかけてきます。読み終わると、子どもたち自身が本棚から好みの絵本を選んで、「次これ読んでー！」と言ってくるようになります。それ以降は、帰りのバスやお迎えを待つちょっとした時間に読み聞かせたり、子どもたちの集中力を高めるために様々な活動の前に読むようにしました。一本調子だった私の保育も、そこから少しずつ柔軟なものになっていった気がします。

この文章を読んでくださっている方のなかで、「最近子どもと接する時間がないなあ」とか、「よく子どものことがわからない」といったお父さんがいらつしやいましたら、ぜひ子どもと一緒に絵本を読んでみることをお勧めします。きつと「こんなことに興味を持つようになったんだ」とか、「面白い考えかたするなあ」とか、普段気付かない我が子の成長ぶりを目の当たりにするでしょう。子育てを母親にまかせてしまったり、子どもにテレビやビデオを見せておくことは簡単ですが、少しの手間で子どもと貴重な時を共有できる、絵本の読み聞かせという「子育てマジック」を使わない手はありません。父親ならではの絵本のセレクトや読み方も、子どもの感性を豊かなものにする助けになるかもしれません。

そういうわけで、息子が生まれた時も早くから絵本をおもち

や代わりに与えたり読み聞かせたりしていました。もちろん内容がよく解らないでしょうが、きれいな色や形、読んでくれる親の声や表情、そういったものを乳児なりに感じることは大切なことだと思えます。今では、母親に読んでもらおうとすぐ、そばにいる私に、その同じ本を読んでほしいと差し出してきます。もちろん最初から読んであげるのですが、これは、絵本を読んでもらう時間が子どもにとって、内容を楽しむ以上に、「この人に自分は愛されている」と感じられる心地よい時間であるからなのでしょう。

今、私にとって「絵本」は、子どもと心を通わせる手段として、かけがえのないものになっていきます。家や保育室に並ぶ少しくたびれた絵本たちは、破れたり落書きがあつたりジューズの染みが付いたりはしていますが、子どもと豊かな時間を楽しみ、ともに成長してきた思い出の記録であり、宝物でもありません。

「先生（パパ）これ読んでー！」保育室で、家で、今日もそんな子どもの一言を密かに待っている自分がいます。

御幸幼稚園（宇都宮市）教諭 Kさん



「おやすみなさい」の前に

我が家では、「今日はもう寝よう」と言っても聞かない二人の子どもに「本を読むから選んで！」と言います。すると、すっと立ち上がり本棚の前でお気に入りを選び、すぐに寝床に直行します。そんな子どもたちの姿を見ると、自分で本を読む事が出来るようになって、読んでもらうという事は、やはりとても嬉しい事なのだつくづく感じます。また、毎日慌ただしく、子どもと真剣に接する時間がなかなか取れない私にとっても、寝る前に本と子どもとともに過ごす、穏やかなひとときは何ものにも代えがたい大切な時間です。

今は主に絵本を読み聞かせしています。字のない絵本にその都度話をつけて読んだり、時には図書館で借りた紙芝居だったりしますが、絵本の殆どは子どもに選ばせています。楽しいのに奥が深いもの、絵の美しいもの、自然や科学などの絵本を通して親子ともに感動したり学んだり、安らいだり、気持ちを共有する素晴らしい実感しています。

これからも子どもたちが、そして私も穏やかな気持ちで「おやすみなさい」を言えるよう、寝床で体と心をふれあいながらの読み聞かせは続けたいと思います。

公立保育所 保護者

思いが自分を変えらるということ

長男が小学一年の頃、友達の影響もあって、悩んだ末に、小型のゲームを買いました。しかし、買って与えておきながらも、子どもがゲームをやっていると、怒っている私がいるのです。やはり親として、私が望む子どもの姿ではないのだと思いつき、意を決し、子どもがゲーム機を置き忘れたものを私のタンスにしまい込みました。思いきって、テレビも押し入れにしまいました。

なんと生活が清々として、心に平安がもどったような気がしてきました。それから、週に一度、まちの図書館に通い絵本を数十冊借りてくるのが習慣になりました。まだ、字の読めなかった二人の弟も、自分たちでよく電車の本を借りるようになりました。一歳の子どもがじつと本に見入って、本をめくっている姿は、驚きと同時にうれしくもありました。

今でも六歳と二歳の弟たちに絵本を読んで聞かせていること、小学六年になった長男も寄ってきて、じつと聞き入っていることがあります。また私にかわって弟たちに本を読んでくれることも多くなりました。子どもたちが成長していく様々な場面で、私も学ぶことが多くなりました。

主婦 Tさん



娘の成長を支えたもの

今年中学二年生になる長女が、鹿沼市の図書館ボランティア「カリブジュニア」をやってみたくて、と言い出したのは、今年の夏でした。今まで社会体験的な活動には全く手を出さずとなかった、どちらかというと内気な娘でした。それが、夏休みを利用して、磯山神社で行われた素話の会に出席したり、他校のカリブジュニアの生徒との交流会に出たりと、積極的に参加しているのです。

そんな姿を見ると、周囲の人は、「さすがお母さんに似て本が好きなのね。」と言います。私自身の職業が教員で、しかも国語科。周りは母親の影響と見るのでしょうか。実は娘の大好きな陰には、育ててくれた祖母と一昨年亡くなった曾祖母の力があるのです。

一歳になったその日から、娘を育ててくれたのは、主人の母。いつも忙しい農家の仕事をこなしながら、一緒に風呂に入る孫に、いろいろな昔話を語って聞かせてくれました。

そして、いつも一番近くにおいて、見守っていてくれたのは亡き曾祖母（主人の祖母）です。明治生まれの気骨を持った人で、よちよち歩きのひ孫の面倒をいつも見てくれました。娘がせがむと、いつもひざの間に座らせ、たっぴりと包み込むように両手に抱えて絵本を読んでもくれました。そのひざの上で、いつも娘は何回も何回も絵本を読んでもらっては、幸せそうに本の世界にひたっていたものでした。

いつの間にか、娘は本の大好きな中学生に成長しました。本の読み聞かせは親のもの、と考えるのが一般的かもしれませんが、でも、二人の祖母の力で、本とのふれあい、心の温もりを知っ

たからこそ、娘の成長があつたように思います。

十月には、市立図書館でのお話会に参加する、と言って、今素話の練習中です。祖母たちに育ててもらった本とのふれあいの芽を、今自分なりに育てているようです。この頃では、おすすめの本を尋ねてきたり、逆に、「今読んでる本、おもしろいよ。読む？」とすすめられたりすることもあります。

家族が支え、育ててくれた娘の成長。これからは、本を携えながら自分の足で歩いて行くのでしょうか。

鹿沼市 Hさん

子どもの本を選ぶ楽しみ

子どもが生まれ、何か世間並みのことをしてあげられないだろうかとあれこれ考え、私もいつのまにか絵本を買うようになりました。子どもの本だから、どんな本を選んでほしいかわからないだろうと、始めはたかをくくっていました。しかし、これがやってみるとけっこう難しいのです。子どもはとも正直で、興味がわかない本、つまらない本だと二度と自分から開きません。私の家にも、そんな子どもにかえりみられない悲しい本が何冊もあります。それが、おもしろくて楽しい絵本だと、何度もその本を持つてくるのです。おかげで文章を暗記してしまいう程です。でも、「パパ、もう一度読んで。」と言われると

何ともいえないうれしい気持ちになるから不思議です。

子どもが歩けるようになってからは、いっしょに町の図書館や本屋さんに行き、時々行くことが習慣になりました。こういう時の子どもの顔は、普段見ることができない表情になります。あつちへいったり、かくれんぼしたり。「今日はどんな本を選ぶのだろう。」子どもは意外な本を持ってきます。子どもがいつものまにか予想以上の成長を遂げており、びっくりさせられることがあります。ああ、今こういうことに興味があるんだと気づかされることもあります。

最近、私は仕事。子どもは宿題や習い事、そしてゲーム。あわただしい毎日を送っています。でも、本を読むときは、「どう思う。」と聞いたり、「パパは？」と聞かれたり、いっしょにその本の話を変えちゃったり、続きを考えたり、そのまま寝てしまったり、ふわふわとした優しい空気に包まれます。

子どもが何歳まで、「パパ本読んで。」「本屋さんに行こう。」と言ってくれるかわかりませんが、言ってくれているうちは、いっしょに本を読んでいきたいと思っています。本を読むこと、本を選ぶことは、いつのまにか子どもだけでなく、私と子どもをつなぐ私自身の楽しみにもなっていたようです。



河内町 男性

本のある暮らし

数年前職場の上司から「やはり君にとって読書は必要か？」と問われたことがある。とっさに「読書のない人生を歩いたことがないので何ともいえません。」と答えた。読書が必要だと思っていたことなどなかった。虚を突かれた感じだった。確かに読書などなくても生きていけるような気もした。しかし、子どもの時から、誕生日のプレゼントも父親の出張のお土産も本だった私は、プレゼントとは本だとばかり思っていた。毎夜、ソファで本を読む父に「おやすみなさい」を言って床に就く日常が当たり前であった。時にやさしく問いかけ、時に背伸びを強いられる本に様々な影響を受けながら多感な時代を過ごした。

結婚や出産は、その都度人生の転機となり、悩み多き問いかけの六割を本に助けられた。子宝とはよく言うが、二人の子どもに恵まれ、育児の楽しさと母親としての醍醐味を十分に味わわせてもらった。子どもたちが物心ついてからは、毎夜読み聞かせをして寝付かせるのが日課となった。日中一緒にいられない後ろめたさもあり、「もっと読んで…」とせがむ声に「もうおしまい」と言えずに、睡魔と闘いながら読んでやった。子どもたちは本の中から豊かな表現力を吸収していった。気に入った表現は生活のあらゆる場面で活躍した。最初は模倣だったものがいつか身に付いたものになった。悲しくて切ない気持ちを二、三歳の息子が「胸のこの辺（胸を両手で押さえ）がチクチクして痛いくらいかわいそうで、僕苦しいよ…」と言ったり、「ご飯が美味しくてホッペが落ちちゃうよ。」と言っただけのよべたをタオルで押さえてきたり、眼を閉じれば昨日のこのよ

うに数々の思い出の場面が浮かぶ。心の成長とともに、その育ち行く心の内を豊かな表現力で母親に伝えようとしてくれた。子どもたちに与える本を選ぶのも楽しかった。読後の感想を語り合うことで共通の話題に事欠くこともなかった。年を経るごとに「命」や「生きがい」についてなど、深いテーマを語り合うことができるようになった。心の成長を確かめながら、話し相手として頼もしくなりつつあることに不思議な感動を覚えた。

いつしか長女は十八歳、長男は十三歳。子どもたちが「この本いいよ。」と薦めてくれるようになった。長女は絵本作家を夢見て、この春、美術大学の洋画科に進んだ。彼女は「言葉の力と絵の力が、子どもにどんな感動を与えるのかを身をもって体験してきた自分にできることはこれしかない。」と言い切つて進路を定めた。十八歳の頃の不確かな自分とは比べものにならないほど娘が立派に見えた瞬間であった。

自分の親以上の環境を、子どもたちに与えられるかどうか不安に思いながら親になってしまった私である。しかし、今、十八年を振り返れば、子どもたちと私の間には三人で絵本や本を読んで、同じ感動を共有してきた歴史が残った。更に自分の人生の折り返し地点に立つてみれば、傍らにはいつでも本があった。

あの時の上司に今ならばつきりと答えられるかもしれない。
「やはり、人生に読書は必要です。」と。

高等学校講師

一冊の絵本を通して

私には四人の子どもたちがいる。同じ家庭環境で育ったはずなのに、不思議に皆それぞれ異なった性格をしている。しかし、ただ一つ共通に持っているものが彼らにはある。それは、本好きであるということだ。私は、子どもたちに早く文字を覚えてもらいたくて幼い時から意味がわからなくても毎日のように絵本を読み聞かせていた。子どもたちの生活の中に絵本を見たり聞いたりすることが食事をするのと同じになつていった。だからといってテレビを見せなかつたり漫画を読ませなかつたりするようなことはなく、彼らが自然と自分で興味を持つものをそのまま与えていくというやり方であった。その頃には文字を覚えさせるといふ「教育」を忘れ、私もともに絵本を楽しむことが日課のようになっていた。子どもたちが成長するにつれて興味を持つようなものを制御しつつ、親の選んだ良書だけを読ませるといふのも一つの教育かもしれないが、私も夫も子どもたちの自然な興味の持ち方に任せた。それがよかつたか今でも結論が出ないが、子どもたちが成長にあわせて自然に本を選ぶ姿、育つていく姿を親として間近にみることでできたのは事実でありうれしくもあつた。子どもたちが幼い時、絵本を読んでいくうちに、聞き手の子どもも読み手の親自身も夢中になつていくのが分かる。子どもと親が一緒になつて驚いたり喜んだり悲しんだりしながら、物語の世界を共同体験していくといった感じだ。親が読んだ所を繰り返したり、登場人物の言葉を子どもが読み手の親より先に言ったりして、子どもは次第に絵本の世界へ入り込んでいく。現実とは別の少し怖い世界へでも、子どもは親の肉声を聞き、息づかいを感じながら、安心して飛び込ん

でいけるのだと思う。

長女が幼稚園に通っている時に配られた月刊絵本に、『めつきらもつきらどおんどん』（長谷川楨子作）という絵本があった。この絵本は長女だけでなく、四人の子どもが全員夢中になって読んだ絵本である。神社の御神木の前で、『めつきらもつきらどおんどん。』と言うと、闇の世界に吸い込まれて、三匹の妖怪と遊ぶという話である。絵本だからこそ、その面白さが發揮される内容であり、絵と文字が縦になったり、横になったり、時には逆さまにまでなつて妖怪と子どもがぐるぐると遊び回るのである。長女は、覚えてしまった絵本の語りを大きな声で私に読み聞かせようとす。次女は面白いページになると、一所懸命に指で「これ、これ。」と示しながら私に訴える。三人目の長男は、私に体を寄せて絵本を見ながらじつと私の話を聞いている。そして、成長した長女が親の代わりに絵本を四番目の次男に読み聞かせ、その次男がにこにこしながら絵本を話に合わせてぐるぐる回して遊んでいる。合い言葉のように声を合わせる様子が我が家で流行つた。

現在、長女は大学を卒業し、舞踊と表現の研究生としてまだ修業中。次女は大学四年生で比較文化論の勉強中。高校生の長男は我が家には珍しく理系。その読書分野は広く、私の知らない情報をもらうこともある。次男は何でもかんでも興味を示す行動派の中学生。皆それぞれやりたいことをやりたいようにやっている。子どもたちは四人ともそれぞれの心の中に幼い時に親と共有した絵本という豊かな世界を持っている。無理して親子が向き合うのではなく、自然に親子が同じ方向を向いて、同じ気持ちになるということが大切なのではないかと最近思うようになってきた。今私の目の前の本棚に忘れられたように置かれた『めつきらもつきらどおんどん』の絵本が、次の世代の子

どもたちと早く一緒に遊びたがっているように見えるのは、親の勝手な想像だろうか。

高等学校講師 Sさん

子どもたちといつしよに楽しんで

「しゃくだ！しゃくだ！」と、声をはりあげ子どもたちの表情をそつとうかがうと、「どうしよう」と困った顔をしている。

やえもんが怒るのも無理もないし、でも格好よくないし、かわかれても仕方がないような気もすると、戸惑っているようです。

図書館ボランティアの一環で始めた読み聞かせは、気のあつた仲間とともに始めました。講習会を開いて、一通りのノウハウは身につけたものの、やはり頼りになるのは自分の子育ての体験、我が子の子どもの時代を思い出して「お話し会」を始めました。

お話し会は、まず本選びから始まります。子どもの本を選ぶのはとても楽しいものです。鮮やかな色彩、大げさな表現、懐かしい風景。登場人物、動物、物のことばや声。全てに作り手のメッセージ、子どもへのメッセージが込められているようです。

お話し会の前夜、子どもたちの反応を想像して、私はいろいろ

るな読み方を試してみます。

読み聞かせを計画したころには、「きちんと聞いてくれるかな？」と心配したのですが、子どもたちの反応のすばらしさに、よけいな力が入ってしまったりして、「感情をあまり出してはいけない」と、途中で反省することもあります。

でも、実際、会場で本を開くと、練習をした成果は、あらわれません。なぜなら、お話し会のもりあがりは、読み手の私だけが作るのではなく、聞き手の子どもたちと一緒に作るものだから。

子どもの表情、しぐさを見ながら私の読み方も変わります。まだ小さな聴衆には、書き手のメッセージを伝えるということよりも、本の世界の入り口に手をかけるきっかけを作ることが大切なのかもしれません。

会場の子どもの全身が、私の声や言葉に向くように、そのために一冊の本と一緒に楽しむ。

お話し会は「読んであげる」のではなく、「楽しむ」ものなのだ、私は思います。

三十年以上も前、子どもたちだけのために読んでいた絵本を、私は今、子どもと楽しむために読んでいます。

このお話し会が、未来の彼らの豊かな世界への入り口になることを願いながら。

図書館ボランティア「ピノキオ」 Sさん

読み聞かせを通して得たもの

安塚小学校で「朝の読み聞かせボランティア」の募集をしたのは平成十二年の九月でした。

その時息子は三年生。学校から帰宅して一番始めにすることはゲーム、愛読書は攻略本という日々を過ごしていました。他人の事には関心を持たない我家の子どもたちに、「人を思いやる心」「自分は他人のために何が出来るか」を、考えて欲しい。わかって欲しいという願いを込めて、小学校でボランティアをすることを決めました。

何の特技も持たない私にできることといえば、本の読み聞かせぐらいかな、なんて気軽な気持ちで参加してしまいましたが、いざ活動を始めてみると難しいことばかり。安易な気持ちで始めてしまったことを後悔することも度々ありました。

安塚小学校での読み聞かせは平成十二年の二学期から始まり、初年度は教養委員を中心にボランティア数名で行われましたが、平成十三年からはボランティアのみの活動となりました。読み聞かせの進め方や本選びの難しさなど様々な問題に直面して、私たちは月に一度定例会を開き練習や反省点を話し合いながら、手探りの状態で活動を続けていきました。

そんな私たちにアドバイスや励ましの言葉を掛けてくださる先生方、真剣にお話を聞いてくれる子どもたち、その子どもたちの笑顔が私たちに勇気を与えてくれました。

安塚小学校では毎年十一月に児童が感謝の会を開いて、普段お世話になっていらっしゃる方々をお招きしています。私たちのグループも招待されて児童から感謝の言葉とメッセージ、それからお花もプレゼントして貰いました。メッセージにはかわいいうらスタもあり、この様な言葉が書いてありました。「いろいろな読み聞かせをしてくれてありがとうございます。そのおかげで、

わたしは読み聞かせが大すきになりました。わたしは、大きくなったら読み聞かせをしたいです。」二年生の女の子からのメッセージでした。私たちの活動が少しでも役に立ち、本の好きな子がひとりでも多く増えてくれればこんなに嬉しいことはありません。

息子にも少しずつ変化が出てきました。朝の読書の時間に、友達が、『ハリーポッターと賢者の石』を読んでいる姿を見て興味をわいたようです。今まであまり本を読まない子だったので、真剣に本を読んでいる姿にちよっぴり感激しました。高校生の娘も小学生の頃に読んだ本や、私が選んだ本の内容を見てアドバイスしてくれたり、読み聞かせを通してうちの子どもたちとの会話が aumentata ことも嬉しいことのひとつです。

読み聞かせをして得たものは私の人生観を良い意味で変えてくれました。私にとって本は物語の世界を楽しませてくれるだけではなく、一緒に活動してくれる仲間、今まで話をする機会の少なかった先生方、そして元気な声で挨拶してくれる安塚小学校の子どもたちなど、大勢の人たちとの出会いをもたらししてくれました。これからもこれらの人たちと過ごす時間を大切にしていきたいと思います。

壬生町立安塚小学校

読み聞かせボランティア「ゆめのページ」

Kさん

私と読み聞かせボランティア

私が読み聞かせボランティアを始めたきっかけは、息子の通う小学校で、新たな試みとして「朝の学習」の時間に、保護者による「読み聞かせ」をと、校長先生が募ったボランティアに参加したことです。

家では時々、夜眠る前にお布団の中で、絵本を読んであげることがありましたが、「読み聞かせ」に関する知識は全くありませんでした。本の持ち方や、ページのめくり方、わからないことがたくさんありましたが、活動をしていく中で、他のお母さま方と情報交換をしたり、研修会に参加させて頂ける機会もたくさんありました。でも、何といても「生」で子どもたちと接することが一番勉強になりました。

「読み聞かせ」の日を楽しみにしている子どもたちの笑顔、お話を真剣な眼差しで聞いている顔、時には大きな声で笑ったり、涙ぐんでしまったり、子どもたちは様々な表情を私に見せてくれます。

「明日はどんな本を読もうかなあ」と考えているとワクワクしてきます。

朝、教室の前で待っていると、子どもたちは次々に私のまわりを集まって、

「おはよ。今日は何のお話？」

「いっぱい読んでネ！」

と声を掛けてくれます。お話が終わると、

「おばちゃん。明日も来てね！」（月に二回なので、本当は明日はないんです…）

そんな時が、「読み聞かせ」をしていてよかったなあと思う瞬間です。

我が子のためにと始まった「読み聞かせ」も今年で四年になりました。今では私の楽しみのひとつとなり、他の小学校や老

人福祉施設でも活動させていただいています。少々体調が悪くても、「みんなの笑顔が見たい」「楽しみに待っていてくれる」と思うと、「よぉくし！頑張るぞ！」と力が湧いてきて、帰りはすっかり元気いっぱいになっています。

これからも絵本を通して、たくさんの人と出会い、交流が持てたらよいなあと思います。

読み聞かせボランティア「ローズマリー」 Nさん

読書への誘い^{いざな}を期待して

起立、礼、生徒たちの好奇心に満ちた瞳が、私の心をかきたてる。僅か朝の十分間の読書の時間に、月一回、社会人ボランティアとして、中学生にブックトークを五か月間実践して来た。古典あり、名作あり、童話あり、詩あり、紹介するジャンルはさまざまである。日常接している教師とは異なり、面識のない社会人ボランティアが語るさまざまな本の紹介は、好奇心も手伝って、よく耳を傾け、目を輝かせ聞いてくれる生徒が多い。

矢板中学校は、朝の読書の時間を日課に取り入れて十五余年になる。ともすると朝のスタートが生徒たちの不揃いで、落ち着かなくなりがちであるが、さすが朝の読書の歴史が重ねられ、ブックトークに教室に出向くと、生徒たちは着席して待つ態度が大変よい。

本を紹介する時間は十分間なので、いかに効果的に無駄なく印象的に興味をそるような内容紹介にするかが課題である。かなり自分で予習をし準備をして、語り口調をも工夫しなければならぬ。私の紹介した本が、クラスの生徒の中で何人読んでもくれるかが一番の関心事である。

十分間という短い時間の中では、本の本筋や興味をそるところまで紹介することは、なかなか難しい。そこで、学校図書館や市立図書館等の身近かにある本で、是非青少年に読んで欲しい本や、私が少女時代に出会った感動を覚えた本、国語の教材と関係ある本等を選択し、ブックトークの対象として選択している。紹介した本が身近にあることによって、読んでみようと思っ掛けになり、発展的に読んでくれることを願って臨んでいる。

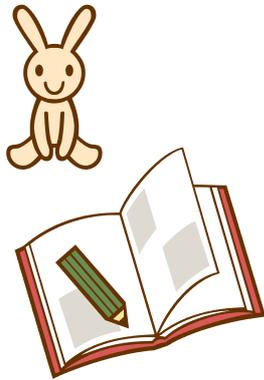
今までにブックトークボランティアとして成功したなと思われる例は、学校図書館の蔵書を見せていただき、更に当該学年の国語の教科書教材に目を通し、国語の学習の予習となるように、集団読書用の作品（教科書教材と同じ作品、同じ作者の作品）を紹介した時のことである。ストーリーのクライマックスのところまで時間切れになってしまった。話の展開はこれからどうなるか期待の持たれるところで、紹介は終わらざるを得なくなり、この後のストーリーの展開はどうなるのか、今日紹介した集団読書テキストが学校図書館の文学ジャンルの棚に四十冊あることを告げた。そして、是非この残りを読むよう課題としてクイズ式で与えてみた。ストーリーの展開が生か死か、切迫した場面であり、手近に本があつたことと、読む意欲づけにクイズ形式で課題を投げかけたことが功を奏し、次の休み時間には、その作品の続きを求めて二十数人の生徒が図書室を訪れて読み通したということである。

作品が短篇であったことと、生徒に課題を与え、解けた人は私宛てに短い解答を寄せるようにしてあったので、効果的であったのだと思う。正解者には、文庫本が買える程度の図書券を贈って賞賛し激励してあげた。興味関心を持つ場面で本の紹介を終わり、続きは自分で読み終わすよう奨励することが、時間の都合上多くなる。その場合は、読む本が身近にあることが大切な条件になる。

思春期や青年期に、心に残る作品に出会いそれがいかなるジャンルであつても、多かれ少なかれ人格形成の糧になつて行つて欲しいと願いつつ、月一回の生徒との出会いでしかないが、瞳の輝き、態度の凛々しさ、若いエネルギーの響き合いに魅せられて、五年間もブックトークボランティアに参加させていた。生徒の前に立つには、自分なりに研修し本に精通していなければならぬ。自己研修のよい機会であつた。何よりも中学生の若さ溢れる姿に接し、たくさんのエネルギーを与えていただいた。

出会つた中学生の何人でもよい。私のブックトークが心のどこかで響いて、残照になつてくれればよいと願つてゐる。

矢板市 Kさん



やっぱり子どもたちは、本が好き

学校などで、絵本の読み聞かせを実践していると、思つても

みない出会いがあります。小学一年生のクラスでお話をしたときの事です。最後の絵本が読み終わり本を閉じて机の上に置きました。すると後ろの席に座っていた男の子が、とことこと前に出てきたのです。どうしたのかなと思つてみると、机の上に置いてある絵本の表紙に描かれている絵を両手で一生懸命引つ張りながら、「のびるかしら」のびるかしらって女のことはだ。きつと髪の毛が長いはずだ」と言います。表紙の絵には主人公の男の子の顔が描かれており、その短い髪を引つ張つていたのです。「のびるかしら」をわゴムではなく髪のことだと思つたんですね。（絵本の題名『わゴムはどのくらいのびるかしら』ぼるぶ出版）

今まで当たり前に読んでいた本の題名にも、聞き手には自分なりの「はてなマーク」があつたんだとはじめて知りました。「なぜ」「どうして」と不思議に思つたらすぐに行動に移す子どもの感性つてすごいなあと驚きました。

子どもたちが本を読まなくなつたと言われていますが、実践を続けていて感じたことがあります。読みたいのだけれど、読む力が弱くなつて、読み続けることが苦手になつてきているように思いました。ですから、読んでもらう「耳からの読書」は、楽しい時間でもあるのです。「聞く」ということは、自分で一冊の本を読むという読書の入り口であり、聞く読書でもあるんだとつくづく思いました。

読み聞かせが終わつた後、「本って面白いね。」と声をかけてくれた子どもたちが、後日この本を読んだら面白かつたと言つてくれた時、読書の入り口が大きくなつたなとエールを送りたい気分になります。

「私、本を読むのが好きなので……、読み聞かせのボランティアになりたいんです。」中学一年生の女の子からの突然の電話

でした。小学生の時に学校で読んでもらったのがとても楽しかったから、自分も、ほかの人に読んでやりたいと思ったそうです。とてもうれしい電話でした。学校などでの読み聞かせは、読み手が一人で聞き手が多数ですから集団での反応はつかめども、個人の反応はつかみづらいものです。とくに高学年になるとなおさらです。ですから楽しく聞いてくれたんだと知ってうれしくなりました。

実践を続けていると、聞き手の子どもたちからいろんなエネルギーをもらいます。一冊の本が聞き手の子どもたちのこころの琴線にふれたと知った時は、読み手冥利に尽きます。

読み聞かせボランティア

「母と子で絵本を楽しく読む会」 Iさん

感性豊かな子に

私の子どもを通う小学校から依頼を受けて、九人の二年生の前で読み聞かせをさせて頂きました。週一回で約二か月間は、私にとってとても楽しい時間でした。私はもともと絵本が好きで、自分の子どもにも読み聞かせをしていました。特に動物が主人公の作品は、子どもが好きという事もあり、家に何冊もありましたので、その中から選んで読みました。

読み聞かせ当日は、毎回わくわくどきどきで、子どもたちはちゃんと聞いてくれるかな、つまらない顔をされたらどうしよう、と思いつながら、教室に入りました。最初はザワザワとして落ち着かないのですが、読み始めると、十八の瞳が一斉に本に集中し、最後迄、よく聞いてくれました。より興味を示してくれる様、登場人物になつたつもりで読みました。

やはり、動物の作品は人気があり、その中でも一番人気は、『うみべのハリー』という犬のお話でした。ホットドック屋さん

が、「いらはい！いらはい！いらはい！」

と、言っているのを、

「ハリー！ハリー！ハリー！」

と、自分の事を呼んでいると、勘違いして、うれしくて、

「わんわん！」

と吠えるシーンを本物さながらの鳴き声で、読んだところ、大うけし、笑いをとった時は、

「やった！」

と心の中で叫びました。子どもたちは最後迄、瞳をキラキラさせて、物語に聞き入ってくれました。読み聞かせ最後の日は、

九人全員が、残念そうな顔をして、
「もう終わりなの？」

と、言ってくれました。一人一人から感謝の手紙をもらい、とてもうれしかったです。また機会がありましたら、是非、読み聞かせをやらせて頂きたいと思いました。

近年、子どもたちの間では、ファミコンゲームなどが主流となり、キレやすい子が増えていると聞きます。読み聞かせを通して、子どもと触れ合い、想像性や独創性など、感性豊かに育ててくれればいいなと思いました。そして私自身も、絵本に限らず、様々なジャンルの本を読んでいきたいです。

主婦 Sさん

子どもとふれあえる喜び

私が読み聞かせたボランテアを始めて一番最初に選んだ本は、私が子どもの頃に夢中になって読んでいた絵本でした。現在中学生の長女が生まれた時に、いつか役に立つだろうと実家から持ち帰ったものが、四歳下の長男が小学校三年生になって、ようやく日の目を見たのです。

子どもとはいえ、多勢の人の前で本を読むという事に不安がありました。目をキラキラさせて絵本に集中してくれる子どもたちを見たら、なんだか嬉しくなり、とてもやりがいのある活動だなあと思える様になりました。

私は年に数回しか読み聞かせに行かないのですが、それでも
「君のお母さん」と顔を覚えてくれて、

「今日はどんな本を読むの？」
「今日は何冊読んでくれるの？」
と声をかけてくれると、ボランテアをやってよかったと心から思います。本を選ぶ苦労はありますが、楽しそうに聴いてくれる子どもたちの顔をもっと見たいと思うのです。

また、家庭では久しく読み聞かせなどしていなかったのですが、この夏休みの親子読書では、少し長い物語を息子に読んであげました。これもまた私が小学生の頃に読んでいた本なのですが、どんな結末だったかと、私もワクワクしながら読みました。読み終えた後で、息子がもう一度読んでほしいと言った時は、私が子どもの頃に味わった感動を息子と共有できた事を、とても嬉しく思いました。

今は子どもと遊ぶ時間が少なくなりましたが、いつしよに本を読んでいる時は、お互いにとっても有意義な時間を過ごしています。これからも、本を通じてできるだけ子どもとふれあえる時間を増やしていきたいと思えます。

宇都宮市立富士見小学校 保護者 Sさん

読み聞かせと大型紙芝居

私は学校支援ボランティアとして、子どもの通う学校で絵本の読み聞かせをしています。今年で三年目になります。毎週月曜日の朝の読書の時間に、仲間と交代で絵本を読んでいます。にぎやかだった教室が、絵本を読み始めると静かになって、子どもたちはじっとお話を聞いています。読み聞かせの場合、お話は耳から入ってくるので、じっくり絵を見ていられるのがよいでしょう。

「読み聞かせ」というと低学年をイメージしがちですが、六年生の教室でも行っています。六年生だつて絵本を読んでもらうのは嫌いじゃないようです。「小さい頃、お母さんに読んでもらったことを思い出す」と作文に書いた子がいました。

読み聞かせの時間、先生は教室にいません。職員室で会議中です。だから子どもたちはともりラックスしてお話を聞いています。おもしろい場面では大声で笑ったり、絵についてみながら口々に何か言ったり、時には質問してきたりします。時間が余ると「もう一冊！」と言われて、こちらが慌ててしまいます。きつと、近所のお母さんが来て読んでいる、というのがよいでしょう。聞く態度を評価されたり、感想を言わされたりしないからリラックスできる、リラックスできるからかえって積極的になれるという感じです。

昨年、図書委員が地元の民話をもとにした大型紙芝居を作ることになり、私たち読み聞かせのメンバーはお手伝いを頼まれました。地元のお年寄りに話を聞きに行き、模造紙くらいの大さきの紙十枚に絵を描くのはなかなか大変な作業でした。今度は「読む」のではなく「作る」方になったわけです。

苦労して作った紙芝居には自然と愛着がわきます。校内での発表会を成功させようと、子どもたちは一生懸命がんばりました。紙芝居を読む練習では、方言の入った会話の部分が難しかったようです。聞いている人がよくわかるように読むこと、できれば登場人物の気持ちや伝わるように読むことを目標に何度も練習しました。

発表会当日、地元のケーブルテレビが取材に来て、子どもたちは緊張気味でしたが、大きな声で上手に読むことができました。読み手の熱意が聞いている子どもたちにも伝わっているのが感じられました。どの学年の子どもたちも、こんな大きな紙芝居を作ったということに驚いていたようでした。

この紙芝居を老人ホームなどで発表したところ、お年寄りの方にとっても喜んでもらえました。今年度は市の教育祭で発表することになり、新しい読み手の子どもたちが練習を始めます。私も陰ながら応援していきたいと思っております。

栃木市立千塚小学校

学校支援ボランティア Iさん

読書の喜び

私が読書の喜びを知ったのは、中学一年の冬休みだったと思う。兄かだれかが読んだのだろう、本箱の片隅に、一冊の古ぼけた単行本を見つけた。ほこり臭い表紙には、『次郎物語』という題名が見えた。

なんとはなしに読み始めてみると、いつの間にか夢中になっている自分に気がついた。しかも、今までに味わったことのない、心がぞくぞくするような感動が突き上げてくるのを感じ、経験したことのない新鮮な感動をだれかに訴えずにはいられないような気持ちになった。

私は、年の暮れ忙しく立ち働いている母に、興奮して呼び掛けた。

「かあちゃん、この本、ものすごくおもしろいぞ……。」

「おもしろい」という言葉がその時の心境を表すにはどうも物足りないのを感じながらも、その言葉以外にはみつからなかったのである。

母は、樽の中に白菜を漬け込む手を休めず、「次郎物語かい、それは九州の小学校の校長先生だった、下村湖人という人が書いたんだよ。いい本見つけたね。」前かがみの腰を曲げたままそう言った。

私は夢中だった。『次郎物語』に没頭した。知らぬ間に陽は傾き、いつの間にか障子が赤く染められていた。

「ご飯だよー。」そう呼ぶ母の声が、何か別の世界から聞こえてくるように感じられた。

『次郎物語』はポケットブックの大きさで、第一部から第六部までにわかれていた。あいにく家にあつたのは第一部だけだ

った。私は続きがどうしても読みたかった。

母は普段、私が欲しいものがあつてねだつても、必要ないと思つたものは絶対に買つてはくれなかつた。それなのに、その時はすぐに私の願いを聞いてくれた。私は飛ぶような気持ちで本屋に走つた。

第六部を読み終えるまでの約一週間、私は『次郎物語』の世界に溶け込み、次郎と一緒に喜び、次郎と一緒に悩み、次郎と一緒に考えた。

あれから四十五年が過ぎた。数えきれない本との出会いがあつた。でも、あの時の感動は今でも新鮮なものとして心に残っている。

宇都宮市 元教員

二人の子どもと読み聞かせ

私は、二児の母です。上は男の子で、ことばを話し出すのが遅く、二歳になつても指さしをして「あーあー」というばかりでした。早くことばを話せるようになるにはどうすればよいかといういろいろ調べているうちに、本の読み聞かせがよいことがわかりましたので、さっそく始めました。私は働いているので、読み聞かせができるのは、夜か休日だけでしたが、時間を見つけては息子を膝の上のせ、絵本を開きました。まだ小さかつた息子は、親の膝の上のることが嬉しかつたようで、絵本に

はあまり興味を示さず、甘えられるのを楽しんでいました。私も無理に絵本を読み聞かせようとはせず、息子と二人の時間を楽しみました。息子は三歳の誕生日までには、ことばが出て、その後急速に話せるようになりました。

下は女の子で、ことばを話し出すのは早かったのですが、風邪を引きやすい子でした。三歳の時に風邪から滲出性中耳炎になってしまいました。この中耳炎は、痛くはないのですが、耳の聞こえが悪くなります。ことばが育っていく大切な時期に耳の聞こえが悪くなるのですが、その後の成長に影響しないかとずいぶん心配しました。週二回耳鼻科に通院するとともに、ことばの発達を促すために読み聞かせも毎日欠かさず行うようにしました。毎晩、二人の間に寝て、絵本を読み聞かせました。子どもたちも成長して、今度は絵本に興味を示してくれました。始めは『のんたん』のシリーズを、それから『14ひきのねずみ』シリーズを読みました。保育園で昼寝をしている二人はなかなか寝てくれませんので、毎晩五冊ぐらいは読んであげました。やがて、読む本を探すために二人を町の図書館に連れていきました。二人の好みにあった本も読んであげようと思っただけです。電車が好きだった息子は『機関車トーマス』のシリーズを選びました。娘は『森のレストラン』のようなかわいらしい動物が出てくる本を選びました。また、宇都宮市の図書館や幼児書の専門店まで連れていって本を探したこともたびたびありました。

幸い娘の耳も早く治り、その後のことばの発達には影響はなかったのですが、子どもたちは本を読んでもらう習慣が気に入ってしまい、私も子どもたちに読んであげるのが楽しかったので、寝る前の読み聞かせは息子が小学校三年生のころまで続きました。

今は子どもたちも中学生と高校生になりましたが、あの頃本を読んであげた時間がとてもなつかしくなります。本のおかげで、忙しい私が子どもたちと一緒に過ごせた貴重な時間だったと思っっています。

益子町住民

円地文子の源氏物語

平成十六年の四月二十日に、叔母の最期を済生会宇都宮病院のホスピスで看取りました。七十七歳の誕生日を翌日に控えての他界でした。

父の妹で子どもものいなかった叔母は、姪の私を大変かわいがってくれました。ホスピスの病室が空いたので、四月に再入院、まだらぼけ状態がはじまっていた叔母の口から、「寂聴ではなくて、円地文子の源氏を読みたいの。」と、言われたとき、驚きとともに何十年も前のことが思い出されました。一回目の入院の時は「太陽」の別冊を中心に病院で疲れない程度の読み物を、叔母に「あなたはまだこんな程度の頭の中身の」などと言われないように、私なりに司書として叔母の好みを考えながら本を選定して持っていったつもりでした。

叔母は約十五年前まで小さな小さな古本屋をひとりで切り盛りしていました。私は小学生のころ夏休みになると決まって忙しい

母にじゃまにされ、「久叔母ちゃんの所にも行けば。」と叔母のお店に行かされました。(追放だと兄たちは私のことをいじめました。)私は私で他の所に行けるといふ単純な理由だけで楽しく、着替えだけを持って父のオートバイの後ろに乗せてもらい、父は父でひとりで暮らしている妹のところに行くのがうれしかったのです。

口数の少ない叔母はいつも暗いお店のすみっこで本を読んできました。私が遊びにいつてじゃまをしても、その一日が変わることはありませんでした。時々来る客、それも小学生を相手にしての商売とはいえないような生活。けれどお金がない、などということばは叔母には無縁でした。今思えば、満ち足りた穏やかな表情をしていたのです。叔母は戦争や夫の死を経験しました。当時子どもだった私でさえ感じたことがあつたはずですが、生きてきた時代が悪かった、社会が悪いなどということばを、叔母の口から聞いたことはありませんでした。叔母は、夕顔のようになよなよとしたたよりなさが嫌いで、六条の御息所のような不気味さのほうが好きだったのです。

寂聴は、瀬戸内晴美のときに仕事場に使っていた目白台のアパートに、円地文子がある日、「源氏物語の現代語訳の本をだすための仕事場をさがしている。」と言って訪れたと、ある雑誌に書いています。寂聴は途中でそのアパートを逃げ出すことになるのですが、その理由を、「円地文子のような強烈な作家と一緒にのアパートになんぞ住めない」と言ったのです。円地文子はそのアパートに来る前には、同じく源氏物語を訳した谷崎潤一郎や平林たい子も住んでいて、刺激を受けていたはずなのに。瀬戸内晴美のときの印象が強い私はその文章を読んで笑ってしまったのですが、叔母は「そうよね。」と言ったのです。その「そうよね。」と「寂聴ではなく、円地文子の源氏が読みたい」と言った叔母のことば

が重なり合いました。円地文子の作品、『女坂』や『女面』の中には六条の御息所と共通する女の怨念、どろどろが読み取れ、寂聴までもが逃げ出してしまふような強烈な個性とエネルギーが発散されていますか？その円地のエネルギーをしっかりと受け止め、読みこなしていた叔母。女性を見る女性作家のするどさ、女性作家を読む女性のするどさ。

「なにかおもしろい物語はないかしら」と大齋院選子にたずねられた一条天皇の中宮彰子は、紫式部に相談します。式部は、「古い物語より新しい物語を作つてさしあげたら。」と答えます。中宮彰子は、それを聞いて、「式部、お前がお作り。」と命令します。叔母には内緒でしたが、私はまだ原文では通読していません。

高等学校司書



子どもたちに名作を

昨年、十数年間探していた本を手に入れた。イギリスの児童文学者、ジョーン・エイキンの『三人の旅人たち』である。私が小学校の国語の時間に学習した物語である。私は小学三年生の頃に学んだと思っていたが、記憶違いだった。実際には小学五年生の下級の教科書（光村図書）に掲載されていた。

大きな砂漠の真ん中にあるちっぽけな駅。その駅には三人の駅員がいるが、もう十五年間も汽車は止まっていない。三人は幸せだったが、思う存分仕事ができないことに不満があった。お金をためたそのうちの二人は、それぞれ東行き、西行きの汽車に乗り旅をする。大きな町と、山と海へ。残りの一人は、砂漠を歩いて北へ向かう。そして駅から二時間ほどの場所にオアシスを見つめる。物語は、「今では、『砂漠』と駅の名の書いてある看板には、『オアシスへは当駅下車』という新しい言葉が書きこまれているのです。」と結ばれている。

この話を初めて読んだとき、子どもながらに、「人生とは何か？ 幸せとは何か？」というようなことを学んだ気がした。美しい切り絵も印象的だった。この本をもう一度読みたいとずっと思っていたが、探す手がかりがなかった。それが、「昔学校で学んだ名作を読みたい、子どもたちに読ませたい」、「学校の副読本として活用したい」というような大人や教師の要望が光村図書に寄せられ、「光村ライブラリー」（十八巻の全集）として出版されたのである。

早速購入した私は、当時幼稚園の年長だった息子に読み聞かせてみた。息子の感想は、「よくわからない」というものだった。まだ早かったのかもしれない。しかし、この全集に入って

いる低学年用の作品、『チツクとタツク』（なんと、挿絵は安野光雅さんだった！）や『かさこ地ぞう』、『くまの子ウーフ』などは楽しそうに聞き、その後、何度も繰り返し読まれた。息子がもう少し成長した時には、『三人の旅人たち』のすばらしさも理解してくれるだろう。

自身が子ども時代に読み、感動した本を、次の世代に伝え、感動を共有することができるといことは、非常にすばらしい。子どもの中に名作を読み、情緒を育むことは、IT時代といわれる現代こそ、一番必要なことである。子どもたちに読書の楽しみを伝えたい。それが、世代を超えた「心のふれあい」なのだと思う。

益子町 Kさん

文学講座を通して

私はある町の文学講座で、六年間にわたって、日本の古典文学についての講読を続けている。年間六回、一か月に一回、一回九十分の講義。二十人から三十人の聴講生である。講座に参加していただいている方々の平均年齢はかなり高い。年齢などまったく感じさせない向学心と理解力の高さに心打たれる。講義に出席する実利などまったくなく、わざわざ聴きに来る人は、かなりの教養と意欲とが必要なはずである。文学を理解

する能力はもちろん、文学に対する興味と関心が持続しなければ到底、地味な私の講義など、受け続けることなど出来ないはずである。その人たちに支えられて、私は、六年間、講義を続けて来ることが出来た。一年目の『万葉集』については四年間講義し、『歎異抄』については一年間、現在（平成十六年）は、『源氏物語』について一年目の講義に入って、間もなく今年度が終了する。『葵の巻』までのハイライトシーンを読んできた。すでに来年度も『源氏物語』であることの予告をしている。『須磨』『明石』が中心になる。

講義の中で出会った方々とのつながりというものが私にとって宝物になってくるといふことの意味深さに心打たれる。というのには、私は、講師の役目をいつやめてもよかつたのである。毎年依頼されるから講座を続けているとはいうものの、自分の仕事を立て込んでくる時などは、実にしんどいのである。他の人を紹介して講座を譲ってしまつてもよかつたのである。九十分の講義を充実させるために膨大な資料を用意し、講義の予習は手を抜けない。そもそも一か月に一回の日時を覚えていただけでも大変。仕事とのスケジュールの調整も大変。投げ出してもいい仕事だつたのである。それが、わたしにとってなくてはならないものになつたのは、「私にはこれしかない、これこそライフワークだ」と気づいたためであり、それ以後、積極的に自分から講座を続けようとしたのである。それは、どういう意味かというのと、私にとって、講義に参加してくれる人々とのつながりが、とてつもなく大切なものであり、その中に私の居場所があつたのだということである。一年目の講義から二十人近くの人々が、毎年講義に参加してきてくれたのである。その人たちに対する責任感、使命感ともいふべきものが、その後の講義継続の原動力になつたのである。自分を支え認めてくれ

る人たちのために人は働くものなのである。年賀状や、講義終了時のお礼のお手紙などが、講義を続ける責務を目覚めさせてくれた。多少しんどい講義であつたにしても、精進してそれを続けるべきだと痛感したのである。それ以来、少々の困難はものの数ではなかつた。戦時中の苦勞話に相づちを打つ。「古代世界の糸口を教えてもらいました。」とおっしゃる今年九十歳の大先生は、六年間続けて出席していてくれる。会うたびに「おもしろいですよ」といつてくださる。ありがたくなる。この人々のために続けなければと思つ。講座をやつていなければ聞けない話である。というより、講義を通じたおつきあいがあるからこそ、生きてくる話というものである。「女学生時代に戻つたようです」と『源氏物語』の講義中に何度も聞いた。講義など何の実利もないこと、しかし、人と人の心の触れあいの中に浮かび来るその味わいに後押しされ、これだけを頼りにして、人は充分にこの人生を生きていけるものと信ずるものである。講義を通じた体験から、私はそう思う。

真岡女子高等学校教諭 Kさん

今回「本を通した心のふれあい体験談」を広く県民の皆様にご応募いただきありがとうございました。

体験談一つ一つには、本との出会いがその後の人生に大きな影響をもたらした様子や、本を通した人とのふれあいのすばらしさが紙面いっぱいに表示されていきました。改めて本が持つ魅力やそのすばらしさに触れることができました。

どちらかといえば、読書好きとはいえない私がこの事業の担当となり、はたして本の持つ魅力やすばらしさを伝えることができるか不安で一杯でした。しかし、投稿されてくる体験談一つ一つを読ませていただく中で、いつの間にかそんな不安は吹き飛んでいきました。今では、中、高校生になった我が子たちになぜ、幼いころもつと読み聞かせをしてあげられなかったのかと悔いているほどです。しかし、今でも遅くないと奮起一番読み聞かせをしてみようと、「おさるはおさる」「ゆうたはともだち」などの絵本を購入してみました。また、学校が「朝の読書」を実施するなら、我が家では「夜の十分間読書」を家族で実施しようと試みました。なかなか毎日とはいきませんが、十分間という短い時間なので、一日の終わりに少しだけ心にゆとりを持てるよう続けていけたらと思っています。

当センターでは保育園、幼稚園、学校、地域、家庭等で行われている先進的な読書活動について、聴き取り調査をもとに『豊かな心』をはぐくむ読書活動 実践事例に学ぶ

として冊子にまとめました。読書を通して「人を育てる」ことへの教師やボランティアの熱い思いが感じられる取組を紹介しています。この体験談集とともに「一読いただければ幸いです」。

なお、ご応募いただいた体験談のうち、紙面の都合上割愛させていただきますものもあります。また、掲載させていただいた体験談はタイトル、所属、氏名は応募作品の記述のとおりとしています。内容につきましては応募作品に忠実な掲載を心がけましたが、表記を含めて、一部修正を加えさせていただきます。この冊子が、様々な活用され、「本を通した心のふれあい」が一層広がることを祈念しています。

栃木県総合教育センター

研究調査部

K

本との出会い

人とのふれあい

―「本を通じた心のふれあい」体験談―

平成十六年十一月

発行 栃木県総合教育センター

編集 栃木県総合教育センター 研究調査部

〒三三二 〇〇〇二 宇都宮市瓦谷町一〇七〇

電話 〇二八（六六五）七二〇四

FAX 〇二八（六六五）七三〇三



「栃木の子どもをみんなで育てよう」運動



古紙配合率100%再生紙を使用しています